２０２４年１月ＮＨＫ北海道地方放送番組審議会

１月のＮＨＫ北海道地方放送番組審議会は、１７日(水)、ＮＨＫ札幌放送局において、１０人の委員が出席して開かれた。

会議は、委員長の司会により開会。議事に先立ち、札幌局長から「ＮＨＫ経営計画2024-2026年度」の概要についての説明があり、議事に入った。

議事はまず、「どうみん手作りクイズ１７９Ｑ」をはじめとして、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、２月の番組編成の説明と放送番組モニター報告、視聴者意向報告が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	金山　準	（北海道大学大学院ﾒﾃﾞｨｱ･ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ研究院　教授）
副委員長	笹森　琴絵	（酪農学園大学　農食環境学群特任准教授）
委　員	伊藤　翔太	（株式会社トリプルワン　代表取締役）
	乾　ルカ	（小説家）
	鹿又百合子	（ｉｄ．ＤＥＳＩＧＮ－ＯＦＦＩＣＥ　代表）
	清水　貴子	（地酒のまるしん商店　店長）
	鍋谷　雪子	（株式会社Ｎａｂｅｙａ　専務取締役）
	樋口　貴広	（株式会社環境テクノス　代表取締役）
	蛭川　隆介	（北海道新聞社　論説主幹）
	前田　茂雄	（前田農産食品株式会社　代表取締役社長）

（主な発言）

＜「どうみん手作りクイズ１７９Ｑ」(総合　１月１２日(金)後8:00～8:41)について＞

○　回を追うごとに内容が充実し、おもしろみが増していると感じる。地域の人たちがスタジオ出演して、クイズを出題していたのも印象的だった。移住者だけでなく、長く地元に根づく人も多数出演しており、その活躍ぶりから地域の魅力を再確認できた。役場職員や地域おこし協力隊の出演が多いのは、自治体とスムーズに連携できているからこそだと感じた。子どもや若い人たちがもっと出演するとよいと思う。回答者の加藤浩次さんや大竹しのぶさんが、出題者のキャラクターを上手に引き出していたと思う。

（ＮＨＫ側）

この番組の前身の「北海道スタジアム」を制作した際に関係を築いた 179 市町村の皆さんと現在も連絡を取り合い、番組制作に協力してもらっている。収録のタイミングを伝えて、話題やクイズにしたいことを募り、手を挙げてもらう形を取っている。発意を持って制作に携わってくださる皆さんに協力をお願いし、私たちは映像をおもしろく撮るポイントやクイズ作成の助言などをして、見守りながら一緒に番組作りを進めている。

○　演出面では地域の人がリモートで出演し、それぞれの顔が画面に並ぶ様子は一体感がありつつ、未来的な演出にも受け取れた。ローカル感が満載で、クイズもほどよい難易度で質もよいと思う。この番組は地域の人たちとのつながりがなければ実現しない番組であり、ＮＨＫがそこに取り組んでいるという点に可能性を感じる。この番組はその特徴が大きく表れている番組であり、見応えがあるので、今後もぜひ見てみたいと思った。

○　プロが作る問題とは違う、一般の人が出題するクイズならではのおもしろさや難しさが感じられ、そこを加藤さんやタカアンドトシの２人がうまく受け入れながら進行していた。大竹さんは早押しクイズなどの際に、加藤さんとタカアンドトシの２人のペースについていけない場面も見受けられたので、進行の工夫で大竹さんをもう少しうまく前面に出してもよかったのではないか。北海道にこだわって制作している番組なので、「北海道出身だから負けられない」といったようなゲストを迎えてもよかったと思う。月形町、音更町、斜里町のパートでは、ＶＴＲは町の紹介から始まったが、クイズの内容は個人に焦点を当てたものであり、町との関係性があまり見えなかったのが残念だった。全体を通して、素人が作ったという手作り感が出ているところにおもしろさや楽しさを感じる番組だった。

（ＮＨＫ側）

「北海道代表の座をかけて負けられない戦い」というような演出を踏まえて人選ができたらおもしろいと思う。今回のゲストでは、タカアンドトシの２人がそのような気概を持って、番組に臨んでいた。

○　月形町のアートヴィレッジを紹介する場面で、「１・２月は冬季休館」という補足を表示しており、こうした細かな情報は番組を見て訪ねてみようと思った人の参考に

なると思った。松前町のくじら汁に関するクイズのときに、加藤さんがほかの町の人たちにも「食べたことはありますか」などと質問していたが、各地の出演者同士のやり取りが画面上に生まれていてよかった。選択問題やドボン問題など、クイズのバリエーションも多彩で、最後まで飽きずに見ることができた。今回はこれまで以上に地域の人に注目していた印象を受けた。番組に登場する地域の人たちのキャラクターから、行ったことのない知らない町の魅力を想像することができた。

○　意外と知らない町の新名所や、地域の隠れた人材、役場や住民の創意工夫を地域の住民によるクイズで伝えるという番組のスタイルはよく考えられていると思う。出演者がリモートで参加する画は、スタジオで出演しての収録と比べると臨場感に欠け、物足りないと感じることが多いが、この番組の場合はリモートの演出によってローカル感や手作り感が醸し出され、演出と内容がフィットしていた。大竹さんという著名人が北海道を訪れ、せっかくゲストとして出演したのであれば、北海道との関わりや思いを話す場面があればよかった。和寒町のパートでは、なぜ鉄道の町なのか、なぜ列車のお宝がユースホステルにあるのか、作家の三浦綾子さんの作品はこういう内容だという紹介があると、よりよかった。松前町のパートでは、なぜ道南でくじら汁が古くから伝わっているのか、松前がくじら汁なのかということを知りたかった。取り上げる市町村の数を減らして、1 つのテーマをさらに深く掘り下げる回があってもよいと感じた。

（ＮＨＫ側）

大竹さんは、収録していないときに、スタジオで北海道への思いを話してくれており、番組でも紹介すれば、視聴者により親近感を持って見てもらえたかもしれない。一つのテーマの掘り下げに関しては、三浦綾子さんの作品の「塩狩峠」の説明を加えたり、くじら汁にまつわる歴史的背景をより深い視点で伝える工夫をするとよかったと思う。今後の制作にあたり、意識していきたい。

○　クイズにならないような問題もあったと思うが、それが逆に手作り感を醸し出していて、地域の人たちの地元への愛着や町をＰＲしたいという気持ちが伝わった。加藤さんやタカアンドトシの２人、大竹さんを含めたやり取りもおもしろく、地域の人の素人っぽさ、クイズ形式により視聴者も参加感を持って楽しめる点が魅力だと思った。各地域のパートがそれぞれ短く、説明を深く掘り下げ過ぎていないことによって、気軽に見ることができるのもよかった。最近のテレビ番組は、クイズ番組やクイズ形式の演出がありふれているように感じる。昔は知識がないと答えられないトンチなどが

多かったが、最近は答えにならないようなことを正解とするクイズも多い。それを「ライトでおもしろい」と受け取る人もいれば、「芸能人の解答はどうでもいい」とチャンネルを替える人もいると思う。クイズ以外でおもしろく地域をアピールできる方法は他にないのかとも感じた。

（ＮＨＫ側）

ふだん、われわれ制作者側が番組で取り上げるのは、傾向として業界のトップランナーや卓越した技術を持つ人など、目立ったトピックのある人が多くなってしまう。しかし、それ以外に興味が持てたり、おもしろかったりするものは何かと考えたときに、ある町の人の「日常」も、他の町の人は知らないということに焦点を当て、みんなで一緒に考えたくなるクイズ形式に落ち着いた。

○　全体として好意的な印象を持ったが、なかなか自発的には見なかっただろうと思うと同時に、この番組のターゲットはどのような層なのか、放送時間を意識してチャンネルを合わせるのはどのような人なのかと疑問に思った。クイズ番組を見るモチベーションには、知的好奇心を満たしたり、正解が分かったときの喜びなどがあると思うが、知的好奇心を満たしたいと思ってこの番組を見る場合、北海道のあらゆるところに興味がある人でなければ、なかなか満足できないのではないか。より好ましい分野の情報をさまざまな手段で得られる時代だからこそ、いかにこの番組を見たいと思わせるか、見る前の時点でどれだけ関心を集められるかは課題だと感じた。ＮＨＫの番組作りとして、たまたま見てもらっておもしろいと思われればよいというわけではないと思うので、飽きられる前に展開の工夫が必要だと思う。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫの番組は冒頭から見なければついていけないような、心して見るようなものが多いと思うが、そうではない番組も必要だと感じている。この番組は、たまたまチャンネルを合わせたＮＨＫで「金曜の夜にローカルな番組をやっているな」、「うちの近くの話題だから見てみよう」というような、気軽なきっかけで見てもらえたらという思いがある。ターゲットはあまり絞らず、幅広い層に家族みんなで見てもらえるような優しい手触りの番組を目指している。

（ＮＨＫ側）

番組のターゲットを絞りたくないという制作意図がある一方で、番組の存在を知ってもらうための働きかけは必要だと考えており、今後も検討していきたい。

（ＮＨＫ側）

この番組は放送回数が年４回と少ないため、どのようにして視聴者に見てもらうか、制作と編成で議論を重ねてきた。これまでは夜７時３０分から２７分間放送していたが、今回は８時から４２分間の放送とし、さらに７時３０分からは各エリア向けにこれまでの「１７９Ｑ」を再編集した総集編を放送した。見られ方としては、「北海道道」や８時台に定時で放送している「チコちゃんに叱られる！」とほぼ同じ水準で視聴され、ふだんよりも比較的女性に多く見られた傾向にあった。今回番組内で紹介した町に住む視聴者にもよく見られ、松前町、せたな町、月形町、和寒町、音更町ではふだんの２倍から６倍見られた。

○　「この人を知っている」や「この町はこうだよね」というような町民同士の交流が番組の副産物として生まれ、地域を盛り上げたい人たちにとって非常によい影響を与えていると思う。ＶチューバーがＭＣを務める演出が現代的で、市町村を紹介する際のイラストもゲームのようなデザインによって、各地域へ冒険するような雰囲気が感じられ、家族で楽しめる仕立てだった。クイズ形式だからこその視聴者の参加感もあり、同時に地元の人にも新たな発見や気付きを与えていると思う。７時３０分から放送していた「新春ＳＰ①道東編」では、冒頭で本別町に関するクイズを少しだけ紹介した後、すぐに足寄町の話題に切り替わり、終盤に再び本別町が出てくるという構成で混乱した。あらかじめ「本別町のクイズの続きは番組の最後で」といった説明をするか、本別町のパートを分割しなければ混乱しなかったと思う。

（ＮＨＫ側）

冒頭でクイズを端的に見せることで、あらかじめ番組のスタイルを示す意図で構成を考えたが、指摘のとおり「この後また本別町のパートがあるから見てね」というような補足があれば、分かりやすかったと思う。

○　まちおこしのアイデアを持つ、地域の魅力を知り尽くした熱意ある人たちに自由に表現してもらい、それをスタジオでさらに魅力的に伝わるようにフォローしたり、ゲストのキャラクターをうまく絡めるように工夫を凝らしたりしていて、よい企画の番

組だった。クイズも回を重ねるにつれて洗練され、人々の生活や背景に見える町の姿をかいま見ることで、名前しか知らなかった町に息が吹き込まれ、生き生きと自分の中に根づいていくような感覚があった。この番組を参考にして、まちおこしの活動に弾みがつく町や、この番組に出るために頭をひねる自治体が増えていくのではないかと思った。月形町から書道家と町役場の方が２人でスタジオ出演していたが、書道家の方が生き生きと話していた一方で、町役場の方は一言もしゃべらなかったのが気になった。せっかくスタジオに来ているので、町やアートヴィレッジについて、町役場の方からの説明も聞けたらよかった。

（ＮＨＫ側）

月形町の役場の方にも収録では話してもらったが、限られた番組尺の都合で、編集の際にどうしても書道家を優先してしまった。ご理解いただけたらと思う。

○　以前の審議会で、この番組が視聴指定番組になってから毎回見ている。初回と第２回は独特のぎこちなさのようなものを感じたが、次第に番組の型ができ、安心して見ることができている。今回、番組冒頭で番組に登場する町の名前や位置を地図でまとめて表示していたのは、非常にいい演出だと思った。以前はこのような伝え方はしていなかったが、番組の趣旨からしても、どこにどのような町があるかというのは大事な情報であり、道外からの移住者にとっては、北海道は広いうえに市町村の名前も難しいので、非常にありがたい。この番組のよいところは、産業振興や町のＰＲというよりも、むしろこの町で生きている人たちがふだんのままで番組に出演して、生き生きと表現するのを楽しく見ることができるところである。回を追うごとにクイズの質が上がっていると感じる。最初の頃には、「町の人が見た夢の内容は何だったか」という出題があったが、こうした手作りならではの突拍子のない問題にスタジオが困るといった内容もまた見たいと思った。

（ＮＨＫ側）

番組アンケートに協力してくれる自治体の皆さんの中には、番組を毎回見ている人も多く、その中でさまざまな気付きを持ってもらい、クイズを作るというハードルも低くなっているのを感じる。回を重ねるたびに意見交換も行い、その結果、徐々にクイズが洗練されてきている。そういったところにも、クイズであることのおもしろさがあり、クイズ形式だからこそうまく回っているとも思う。個々の内容を深掘りしたほうがよい場合もあると思うが、この番組はある意味で間口を広く取った番

組だというように振り切っているところもある。

＜放送番組一般について＞

○　１２月５日(月)～９日(金)の「ほっとニュース函館」(総合 後6:40～7:00 道南ｴﾘｱ)を見た。鹿部町の「浜のかあさん食堂」を取り上げており、定番の定食だけでなく、料理教室という形で、ちゃんちゃん焼きやブリカツが売りの新しいレストランも紹介していた。回を重ねるごとに、リポーターの奥野真代キャスターと地域の人たちのコミュニケーションがスムーズになり、楽しくて温かい印象が増していると感じる。このようなエリア放送が「１７９Ｑ」のような番組につながっていくのだろうと感じるとともに、放送局と地域の人たちのつながりが、有事の際に現地の情報発信をする場面に生きてくると思った。

（ＮＨＫ側）

昨年度から開始した中継シリーズは４回目を迎え、グルメをテーマに道南エリアの１８自治体を一巡した。キャスターと地域の人たちとのやり取りについては、生放送ならではの時間管理や、撮り直しができないといった緊張感に慣れてきたこともあり、和やかに笑顔でコミュニケーションできていると思う。生放送をきちんと届けるためのスキルの習熟は、制作スタッフにとって有事の際の訓練にもつながる。地域の人の出演が地域の元気につながり、元気な人がいるということがまた地域の自信につながっていくと考える。今後もご意見を参考にさせていただき、継続を検討していきたい。

○　１２月２２日(金)の３０ＤＡＹＳ「岩内　熱々の町」(総合 後7:30～7:55 北海道ﾌﾞﾛｯｸ)を見た。よい面だけでなく地域の課題にもスポットを当てており、地域の人たちの複雑な心境もかいま見えて、充実した内容の番組だった。岩内町自体が希望と課題のバランスが取れた地域なのかもしれないと思い、非常に興味深かった。この番組を見る前に、１２月９日(土)のレギュラー番組への道「世界の団地に泊まってみたら」を見た。数週間、海外の団地にディレクターが泊まり、地域の人と一緒に過ごしながらその土地のなりわいやコミュニケーションを紹介しており、これは「ローカルフレンズ滞在記」と同様のコンセプトだと感じられ、ＮＨＫ北海道発の企画がＢＳの全国放送でも取り上げられる企画になったのではないかと興味深く見ることができた。

○　１２月２２日(金)の３０ＤＡＹＳ「岩内　熱々の町」を見た。岩内町を２５分という短い時間で凝縮して紹介していたが、全体的に駆け足だったようにも感じた。町民の優しさや温かさ、飾らない人柄が見えるとともに、行ってみなければ分からないこと、地元の人だけが知っていることを伝えており、「３０ＤＡＹＳ」のコンセプトをよく取り込めていたと思う。ディレクターがカフェに行くと店が閉まっており、店主に電話をしたところ「ミーティングがあるから時間が取れない」と言われる場面があったが、最初から約束せずに訪問したのかが疑問だった。もし約束していたのならば、カフェの店主の印象が悪くなるのではないかと思った。その後訪れたすし屋では、孫が店主となって新店舗を展開する様子まで描いていたが、たまたま入店したすし屋からそこまで取材が広がったのであれば、でき過ぎた話のように思えた。最初の入店時に「カフェの隣のすし屋に入ってみた」という表現をしていたので、もし事前情報をもとにそのすし屋に行ったのであれば、視聴者に誤解を与えると思う。

（ＮＨＫ側）

今回は入局５年目のディレクターが担当した。そのディレクターは、取材の中で見えてきた地域の課題を番組に取り込む力量があり、これまでとはやや異なる作りになったと思う。「ローカルフレンズ滞在記」の手法が広がっており、４月から鹿児島局では「ローカルフレンズ滞在記」の鹿児島版を月に一度放送している。ディレクターの顔や取材のプロセスが見えることで、ともに地域を発見していく感覚で楽しめる点、リアリティを感じられる点が持ち味だと思う。冒頭でディレクターがカフェ店主を訪ねる場面については、取材自体の了承は事前に得ていた。ふだん店主は店にいると聞いていたが、訪ねる時間は決めていなかったため、取材先に急きょ予定が入ったタイミングと重なってしまった。この経緯の説明が足りなかったと思う。すし屋については事前に情報を得ていたわけではなく、カフェの店主の紹介により、たまたま隣の店に入ったのだが、紹介であることについて言及すれば、予定調和だと誤解を招くことはなかったと思う。今後の制作の参考にしていきたい。

○　１２月２２日(金)の３０ＤＡＹＳ「岩内　熱々の町」を見た。地域のディープなところに入り込んでいて、見応えがあった。ディレクターが地域の人と接する態度は横柄でもなく、かといって堅過ぎることもなく、好感が持てた。花火を見るシーンは、自身も一緒に見ているような気持ちになり、町全体がオレンジ色に照らされる中で、みんなが特別に集まるわけでもなく、何となく立って花火を見る様子が印象的だった。

番組タイトルの「熱々」は、熱い掛け流しの温泉が出てきたので、それになぞらえたものなのか、何を意味するのかが気になった。規模の小さい町を描くとき、人の温かさやつながり、垣根の低さなど、ある種の紋切り型的な部分が前面に出てしまうことが多いと思うが、せっかく３０日間その土地で過ごしたのに、どの町に対しても言えるような、ある種のよくある田舎感のようなものが繰り返されてしまうのはもったいない。町の温かさは本物だと思うが、３０日間過ごしたからこそ見える、魅力を伝えてほしい。

（ＮＨＫ側）

人の温かさやつながりといった紋切り型の部分があるという意見はしっかり受け止めたい。意図しているわけではないが、出会う人たちがローカルフレンズによる紹介ということもあり、非常に温かい人たちが多いため、その面を中心に描くことになってしまうのかもしれない。しかし、初めから人の温かさを描こうと思って町に入り込むと見落とすものも多いと思うので、あくまで発見を丁寧に拾い上げ、予定調和にならないように気をつけていきたい。

○　１月１５日(月)の「ほっとニュース北海道」を見た。「ＲｅＮｅｗｓ北海道」のコーナーは、ニュースのアーカイブス映像を活用しており、自身の人生を重ねて楽しく見ることができるおもしろい企画だった。今後も期待したい。

○　１２月１６日(土)の【土曜ドラマ】デフ・ヴォイス　法廷の手話通訳士「前編『記憶の中の少女』」(総合 後 10:00～11:13)と、２３日(土)の「後編『もうひとつの家族』」(総合 後 10:00～11:13)を見た。このドラマは手話のせりふも、それ以外のすべてのせりふにも字幕がついていたが、画面上ではまったく邪魔にならず、それでいて読みやすい、どんな人でも楽しめる配慮がされていた。原作では、日本手話のほかに日本語対応手話というものが出てきて、どちらか片方しか分からない者同士だとコミュニケーションがうまくいかないといった、日本国内の手話の難しさが描かれていた印象がある。一方、ドラマでは、老人と手話で話す場面で「あんた、懐かしい手話使うな。我々にとっては外国語も同然だよ」と、同じ日本国内の手話でも違うタイプがあることを示唆していたが、そういったことを知らない視聴者にとっては両者の手話が同じに見えて、意味が理解できない人もいたかもしれないと思った。ドラマでは、ろう者役の登場人物が多かったが、演じたのはろう者の俳優とのことで、当事者にしか表現できない圧倒的な説得力があり、彼らの存在があってこそ、このドラマが完成したと思う。刑事役を演じた遠藤憲一さんも存在感があり、よいキャスティングだった。

○　１２月２４日(日)のＮＨＫスペシャル「メジャーリーガー大谷翔平～２０２３　伝説と代償　そして新たな章へ～」(総合 後 9:00～10:04)を見た。ＮＨＫプラスに掲載されていた番組紹介が非常に興味を引き、番組を見たくなる内容だった。リポーターに対して、もっと大谷選手に突っ込んで、さまざまな話を聞いてほしいと思った視聴者もいるかもしれないが、ＮＨＫの中で選び抜かれた最高の取材陣で挑んでいるのではないかと想像した。今回のように、海外で活躍する日本人を取り上げた番組が増えることで多くの視聴者が励まされると思う。

（ＮＨＫ側）

本部のスポーツ担当に、大谷選手に信頼を置かれているディレクターがおり、継続して取材を行っている。大谷選手は毎年この時期に取材を受けてくれていて、「ＮＨＫスペシャル」として放送している。大谷選手は過去の取材では淡々とした印象があり、そこが持ち味でもあったが、今回のインタビューでは本人がさまざまな経験を経たこともあったのか、以前よりも深みのある話を聞けていたと思う。

○　１２月３０日(土)の「今朝の秋」(総合 前 0:44～2:15)と、あの日　あのとき　あの番組「拝見　山田太一様」(総合 前 11:00～11:49)を見た。見終わってからも静かな余韻が長く続き、山田太一さんの脚本の力を感じた。数ある作品の中から追悼番組としてこの作品が選ばれてよかったと思う。「あの日　あのとき　あの番組」では、森田美由紀アナウンサーの進行とナレーションが大きな喪失感を柔らかく包み込んでくれるようで、落ち着いて見ることができた。ＮＨＫだからこその貴重な映像が満載だったと思う。

○　１２月３１日(日)の「第７４回ＮＨＫ紅白歌合戦」を見た。旧ジャニーズ事務所の所属タレントが出場しないのは、今までの番組の歴史の中でもけうな回だったのではないかと思う。演出の部分では、ステージのみの展開ではなく、会場や画を転換させることで見やすくなり、非常にスマートだった。ＹＯＡＳＯＢＩの「アイドルコラボステージ」は紅白ならではの演出であり、今の時代に合っている内容だったと思う。今回のように見応えのある回でも「視聴率が悪かったらだめだ」という報道を目にするが、そもそもＮＨＫが視聴率にとらわれるべきなのかという点を考えさせられた。今回のような新しい形の「ＮＨＫ紅白歌合戦」は、賛否が生まれているからこそ大成功だったと言えるのではないかと思う。

○　１２月３１日(日)の「第７４回ＮＨＫ紅白歌合戦」を見た。総合司会の３人に与えられた役割が多すぎたように感じる。歌手が司会を務める場合であれば歌唱の場面があっても自然だが、タレントや俳優に歌唱などの慣れていないことを求めるのはかわいそうだと思った。

○　１２月３１日(日)の「第７４回ＮＨＫ紅白歌合戦」を見た。伝統と新しいものを組み合わせながら、さまざまな年代をターゲットに、家族でも楽しめる番組作りを意識しているように感じた。ＮＨＫプラスでの配信があるので、「紅白ウラトークチャンネル」やタレントのウェブ配信と同時に見ることができたり、見逃し配信もあったりしたので、家族みんなで楽しむ機会が増えたと思う。今回のテーマ「ボーダレス～超えてつながる大みそか～」の意味合いを考えると、男女で組を分けることや、投票によって勝敗を決める演出がふさわしいのか疑問に思った。若い層に人気だと思われる出場歌手の登場場面で、司会者が「おじさんに分かるように教えて」といったせりふを言う場面がたびたびあったが、「おじさんには若い歌手の歌は分からないだろう」と決めつけているようにも感じられ、違和感を覚える人もいたかもしれない。このように「ボーダレス」という難しいテーマと矛盾する場面がところどころあったのではないか。総合司会の構成も有吉弘行さんと若い女性１人、若い男性１人のほうがよかったと思う。さまざまな背景の人が気持ちよく見ることができる番組作りへの配慮を期待したい。

（ＮＨＫ側）

コロナ禍のときに、密を避けるべくスタジオを多用したり、中継を入れ込んだりしたことで、ステージ転換により時間が押すことが減った。従来は時間が押すのは当たり前と言われていたが、今ではほとんどそのようなことはなく、予定どおりの尺で進むようになった。今回の「ＮＨＫ紅白歌合戦」は、ＮＨＫプラスの視聴ＵＢ（ユニークブラウザ）数は 187 万を記録し、放送本編もリアルタイムとタイムシフトを合わせて、第一部、第二部ともに 5,000 万を超える視聴人数があるなど、さまざまな方法で見られたと受け止めている。視聴率が悪かったという報道もあるが、このような報道も、まだ「ＮＨＫ紅白歌合戦」が注目されているからあるのだと前向きに受け止めたい。毎年、司会者には何らかの企画コーナーをお願いしているが、歌唱以外の内容を担当することもあり、ご意見として承りたい。

○　１月１日(月)のニュース「令和６年能登半島沖地震」関連を見た。能登半島地震直

後の報道で女性アナウンサーが厳しい口調で避難を訴えていたが、地震に限らず台風などでも「自分は大丈夫だ」と思い込んで逃げなかったり、様子を見に行ったりする人もいると聞くので、急を要する場合や大きな被害が予想されるような場合には、こうした厳しい訴え方も必要だと思った。

○　１月１日(月)のニュース「令和６年能登半島沖地震」関連を見た。アナウンサーが感情的に「逃げてください」と伝えたのが話題になっていたが、赤字で「逃げて」というテロップ表示が出るのも今までなかったことだと思う。ニュースなので、あれほどの感情を込めることが必ずしも正しいかどうかは分からないが、何よりも優先して命を大事にしてほしいという感情が伝わり、信頼感を持てた。発災からわずか４日後の１月５日(金)にＮＨＫスペシャル「最新報告　能登半島地震～命の危機いまも～」(総合 後 10:00～10:45)を放送していたことには驚いた。

○　１月１日(月)のニュース「令和６年能登半島沖地震」関連を見た。発災翌日の午後９時まで地震関連のニュースを伝えていた。ＮＨＫの使命として当然のことだとは十分に理解しつつも、いつまでニュースを伝えるのが適切なのか、災害時にはいつも考えさせられる。津波注意報が解除された後もいつまでニュースを伝え続ける必要があるのかと思う一方で、ニュース以外の番組を放送してもいいのかという思いもある。災害の規模によって、どこまで放送するのかというＮＨＫの基準があれば知りたい。また、２日の午後９時から通常の番組編成に戻ったが、新千歳空港発の旅客機と海上保安庁の航空機の衝突事故が羽田空港で発生し、北海道の人たちにとっては大きな衝撃が走った時間帯だった。旅客機の乗客・乗員は全員が脱出したと伝えた後ではあったが、事故の続報がまだ気になる時間帯であり、国土交通省の記者会見の中継なども放送されなかったのは残念だった。また、気になるのは、北陸で通常の営業を続けている観光名所の存在である。北陸に足を向ける人が少なくなっており、余震も続く中で積極的にＰＲすることは難しいが、報道の中で「平常の営業をしているところもある」と折に触れて伝えることで、現地の人は必要以上の打撃を受けずに済むのではないかと思う。連日深刻な被災地の様子ばかりを伝えることで、北陸全体がそのような状況だという印象を与える可能性もあり、平常であるところを伝えるのも重要ではないかと感じる。

（ＮＨＫ側）

最も厳しい状況に置かれた人たちにきちんと情報を届けるというのがＮＨＫの災害報道の基本的な姿勢である。被災現場では停電によって、使えるメディアが限られる可能性があり、あらゆる方法で伝えるため、大津波警報や津波警報が出ている

ときや、震度６弱以上の揺れを観測したときにはテレビとラジオの全波でニュースを伝え始めるという基準がある。アナウンサーの呼びかけについては、特に東日本大震災以降、大津波警報の際にはそれに即した呼びかけをするべきという方針になった。正常性バイアスと言われる「自分は大丈夫だろう」という人間の心理を打破すべく、警報と注意報のときでは、呼びかけのしかたを大きく変えるように日々訓練しており、今回の大津波警報の際にもその方針に即して対応した。発災翌日の午前１０時に北海道も含めて津波注意報が解除となったが、夜までニュースを伝えた。北海道で発表されたのは注意報のみで、どちらかというと部分的な影響にとどまったが、離れた地域に家族がいる場合や仕事のつながりなど、さまざまな意味で関心を持つ人がいることを勘案しながら、どの段階で通常の放送に戻すのか、範囲を絞った放送に移すかというのはその都度の判断としている。ニュースを始める際の基準はある程度定まっているが、終了する判断は難しく、今回は甚大な被害があったことを重視した。羽田空港での航空機どうしの衝突事故の対応についても関心が高かったと思うので、報道の判断という意味でのご意見として承りたい。北陸では、人の生死に関わる部分を優先した放送が多くなる一方で、産業面についても意識して取材を進めていると聞いている。業種によっては大きな打撃を受けているところもあるので、引き続き取材を続けていく。

○　１月１日(月)のニュース「令和６年能登半島沖地震」関連と、２日(火)の「羽田空港で日本航空の機体炎上」関連を見た。どちらも被害が甚大で緊急性が高く、報道にも難しさがあったと思うが、いずれの報道もそのときできる最善を尽くして伝えていた。衝突事故については、情報が出るたびに一般の人たちが「管制官が悪いのではないか」といった犯人探しを始め、ＳＮＳでひぼう中傷を行うという流れがあったが、航空事故調査は誰かの責任を追及して罰するために行うものではないということ、同様の事故を二度と起こさないことが目的であるということを報道の際にあわせて伝えたほうがよいのではないかと思う。

（ＮＨＫ側）

航空事故調査は原因究明のために行っていることだが、刑事責任について警察・司法の観点から捜査が進む。ＮＨＫとしては、あくまでも客観的事実を視聴者に伝えることを全うし、根

拠のない情報により誰かが傷つくことがないようにしなければならない。事故に限らず、災害時にも誤った情報が増えることがあるが、一つ一つきちんと検証して伝えることを今回の報道でも徹底している。

○　１月１日(月)のニュース「令和６年能登半島沖地震」関連を見た。アナウンサーによる悲鳴にも似た呼びかけは、直ちに行動すべきであることを端的に伝えており、日頃の訓練の成果が表われているのだろうと感じた。真偽の分からない情報や過剰な演出は一切排除して、必要な情報のみを的確に伝え、情報の出し方や専門家の解説のタイミングなども命を守るための放送として卓越していた。発災の翌日もＮＨＫは夜９時まで災害報道に徹し、その後の関連番組も含めて、被災者や国民に寄り添い続けていると感じる。さらに、被災地で地上波の放送が見られないという状況を受けて、ＢＳの３チャンネルで放送を届けているが、避難場所から大相撲やドラマなどを見て、その間だけ日常に戻れたような気持ちになった人もいると思う。迅速にニーズに応える感受性は公共放送の真骨頂であり、有事の際にこそ真価を発揮する使命感や責任感を感じた。「ほっとニュース北海道」でも随時、地震関連の特集を放送しており、ＱＲコードによる誘導先のウェブサイトからもさまざまな災害関連情報に触れることができ、多様なニーズに応えようとする姿勢を感じた。有事の際に国民がチャンネルを合わせるのはＮＨＫだと思うので、信頼できる誠実な姿勢を守り続けてほしい。

○　以前は年末年始にＮＨＫでしか制作できないような重厚な歴史ドラマを放送していたが、今年の年末年始は放送がなく残念だった。

（ＮＨＫ側）

昨年までは総合テレビで「正月時代劇」を放送していた。今年は、１２月２９日(金)にＢＳプレミアム４ＫとＢＳの同時放送で「【特集ドラマ】大岡越前スペシャル」を放送した。総合テレビでは、１月１日(月)に昨年放送した「【正月時代劇】いちげき」をアンコール放送する予定だったが、能登半島地震関連のニュースのため休止となった。

ＮＨＫ札幌放送局
番組審議会事務局

２０２３年１２月ＮＨＫ北海道地方放送番組審議会

１２月のＮＨＫ北海道地方放送番組審議会は、２０日(水)、札幌グランドホテルにおいて、９人の委員が出席して開かれた。

会議は、委員長の司会により開会。議事に先立ち、札幌局長から５月１５日（月）に放送した「ニュースウオッチ９」報道へのＢＰＯ意見について報告とあいさつがあり、議事に入った。

議事はまず、北海道道「よくばりに生きる～続・病に向きあう網走の医師～」をはじめとして、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、1月の番組編成の説明と放送番組モニター報告、視聴者意向報告が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長	金山　準	（北海道大学大学院ﾒﾃﾞｨｱ･ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ研究院　教授）
副委員長	笹森　琴絵	（酪農学園大学　農食環境学群特任准教授）
委　　員	伊藤　翔太	（株式会社トリプルワン　代表取締役）
	乾　　ルカ	（小説家）
	鹿又百合子	（ｉｄ．ＤＥＳＩＧＮ－ＯＦＦＩＣＥ　代表）
	鍋谷　雪子	（株式会社Ｎａｂｅｙａ　専務取締役）
	樋口　貴広	（株式会社環境テクノス　代表取締役）
	蛭川　隆介	（北海道新聞社　論説主幹）
	前田　茂雄	（前田農産食品株式会社　代表取締役社長）

（主な発言）

＜北海道道「よくばりに生きる～続・病に向きあう網走の医師～」
（総合　１１月１７日(金)後7:30～7:56)について＞

○　自身が入院を続けなければならない状況下でも、早く勤務先の病院に戻って患者と会わなくては、という網走厚生病院の医師の鈴木夕子さんの気持ちを伝えていたが、切実な思いが伝わると同時に、地域医療の厳しい現状を感じた。鈴木さんがギターを弾いている場面でノースリーブの衣服を着用しており、袖ぐりから中に着ているものが見えていたが、下着ではないかと心配になり、編集で見えないように工夫できなかったのかと思った。当初は、結婚を機に網走へ移住して医師として働く姿に迫ろう

と取材が始まったが、途中で鈴木さんからがんであることを聞き、番組の主題が変化していったということを、鈴木さんが自身のＳＮＳで書いていたが、方向転換の経緯や番組制作の背景を知りたい。

（ＮＨＫ側）

鈴木さんの友人から札幌局のディレクターに「網走に移住して地域医療を支えているすごい医師がいる」という情報があり、それをきっかけに取材を開始した。取材を進める中で鈴木さんがステージ４のがんを患っていることが分かり、また、ディレクターが鈴木さんの人間性やことばの持つ力に心を打たれて、当初の企画趣旨とは違う方向で番組制作を進めることとした。３月の放送では、鈴木さんの現状と、どのように地域の人と支え合い、勇気を与え合っているかという部分に焦点を当てた。放送後、鈴木さんから「私のことをこれからも撮り続けてほしい」という話があり、取材を継続することとした。そして、今夏に鈴木さんの病状が変わり、大きな手術に臨むこと、その後また現場に戻ろうとしていることが分かり、今回の続編の制作を決めた。地域医療の現状という点では、鈴木さんがいなければ医療が崩壊するというわけではなく、これまで支えてきた地域医療にコミットし続けることが自身の力になるのだという鈴木さんの強い思いで、戻る場所を残してもらうよう病院にお願いしているということだった。ノースリーブの衣服を着用していた場面については、指摘のあった点に気付いておらず、必要に応じて映像を加工するなどの対処ができたと思う。今後気を付けていきたい。

○　医師自身が壮絶な闘病生活を送りながら診察も続けているという異色のドキュメンタリーで、前向きに生きる鈴木さんの明るさ、強さに圧倒された。ただ、自分自身がもし同じ状況に置かれたらと想像すると、とても同じようにはできないだろうとも思った。番組を見て勇気づけられた人がほとんどだと思うが、中には自身との差を感じて打ちひしがれてしまう人もいるのではないか。鈴木さんは番組の中で笑顔を絶やさずに語っていたが、絶望的な気分になる場面や打ちひしがれる姿を見せているのであれば、そのような姿も取り上げることで視聴者が共感できたのではないかと思う。オホーツクに住む人たちが皆同じような治療が受けられるわけではないであろうことや、ＪＲやバスの減便によって都市にある病院へのアクセスが難しくなるなど、地域医療が置かれている現状にも想像が及んだ。

（ＮＨＫ側）

取材中、鈴木さんが涙を流すシーンもあった。それは非常に珍しいことで、その場面の映像を使うことも考えたが、今回は番組を見て感動してほしいということよりも、鈴木さんから力をもらってほしいということをねらいにしていたので、そのシーンはあえて使わず、ＳＮＳにつづられたことばの紹介のみにとどめた。

○　重い病気を抱える人への継続取材というのは、取材の着地点をどこに据えるのかということを含めて、非常にデリケートで難しいと思う。ゆえに、今回の放送が続編であることに危惧の念を抱いたが、冒頭で鈴木さん自身が継続取材を望んだと言及していたことで安心した。鈴木さんが繕わずに思いを語り、ありのままの表情を見せていた点が非常によかった。鈴木さんが診ている患者の多くが、自分のこと以上に彼女を心配する様子から、鈴木さんがどれほど地域医療になくてはならない存在かというのを思い知らされた。なお、これは鈴木さんの人柄がすばらしいのであって、今回の「北海道道」がすばらしかったと結論づけるのはいささか乱暴だと思うが、真摯かつ誠意を持った取材により、鈴木さん本人が取材継続を望むほど、番組ディレクターが信用を得たのだろうと推察できた。その取材姿勢と、鈴木さんを取り上げようと決めた点は評価したい。

○　病気と闘いながらやりたいことはやる、という鈴木さんの姿が印象的で、多くの人が鈴木さんの生き方に背中を押されたと思う。また、この番組に鈴木さん自身が取り上げられることによって、後任の医師を探しているのではないかとも感じた。今回のターゲットとなる視聴者層は、働き盛りの世代や引退した世代、病気やけがを抱えている人たちなど、幅広いのではないかと思った。

（ＮＨＫ側）

鈴木さんは後任を育てる取り組みもされており、院内で自身の知識を継承する研修をしたり、講演を行っている。鈴木さんの姿から普遍的なメッセージを伝えることができるのではないかと考え、番組ターゲットは多くの方に見ていただけるようにと設定した。

○　鈴木さんの生き方に迫る番組は今回が２回目ということで、初めは続編を制作する必要があるのか疑問に思ったが、自身の体験を知ってもらうことで何かにつながれば

という鈴木さん本人の意思があったのかと想像した。発信してほしいという鈴木さんの勇気や、さまざまな人に現状を伝えたいという気持ちを感じると同時に、地域医療の大変さを併せて知ってもらうことで次の担い手につなげたい思いがあるのではないかと思った。非常に難しいテーマであり、取材も大変だったと思うが、すばらしい内容だった。

○　「何も諦めない、よくばりに生きる」という鈴木さんの生き方が番組タイトルに象徴されていたと思う。鈴木さん自身の不安や思いを赤裸々に語っていたのは、ディレクターとの相当な信頼関係があったからこそだと感じた。ディレクターが地域の中に入り込み、鈴木さんのみならず地域の人たちからも直接話を聞き、その中で鈴木さんの生きざまを伝えるというドキュメンタリーになっていた。

○　初めは鈴木さんの強さを感じる場面が多く、医師だから病気に対して冷静でいられるのではないかと思ったが、その後、弱さを映す場面を見て、同じ人間であることを感じると同時に、鈴木さんの思いや人生観を受け止めることができた。地域医療への貢献が本人のモチベーションになるとともに、その志が地域医療を支えているのはすばらしいが、医師本人が地域で十分な治療を受けられないのは問題であり、医療体制や人員配置に対して疑問を感じた。制作にあたってそのような問題提起の意図はあったのか。続編を放送するにあたり、改めて１回目の再放送をしたのか気になった。ＮＨＫプラスで配信される番組とされない番組があるが、その判断の基準を知りたい。

（ＮＨＫ側）

今回は１作目の再放送はしていない。再放送の実施については番組のテーマ、内容などを考慮してその都度判断している。ＮＨＫプラスでの配信は、出演者ならびに権利者にネット配信の許諾を得られるかが必須要件となる。

○ 楽しみや生きがい、自分の人生を諦めない気持ちが彼女を支えているということは、番組を見て誰もが感じたと思う。がん患者のみならず、厳しい現実と向き合う人が皆励まされ、目標にできる生き方でもあると思った。継続取材をしてほしいと鈴木さんに思わせるほど信頼を得たディレクターにも敬服する。一方で、視聴者の中には、個人的な理由で傷ついた人もいるのではないかと感じた。今回のように誰もが当事者になり得るテーマは、見る人の立場や状況によって受け止め方の温度差が大きいと思う。番組を制作するにあたっては、番組を通して誰かを傷つけたり、惨めな気持ちにさせたりしていないかという視点を持ち続けてほしい。鈴木さんへの取材はどこまで継続する予定なのかを知りたい。

（ＮＨＫ側）

今後は、担当ディレクターが転勤しても取材を続けるという方針で考えている。取材する以上はいずれ放送することを前提に、鈴木さんと情報共有をしながらこれからも長く関係を続けていきたいと考えている。

○　鈴木さんが非常に魅力的で、研修医時代のエピソードを楽しそうに話す姿や、手術を終えて職場に戻った際にスタッフに歓声で迎えられるシーンなど印象的な場面が多かった。一方で、人によっては鈴木さんの強さを感じると同時に、「自分とは全然違う」という受け取り方をしてしまうのではないかと思った。弱い部分が見える場面もあったが、場面が変わると明るくなっていて、弱音を吐く鈴木さんと明るい鈴木さんがうまくつながらない部分があったように感じた。彼女もただただ明るいわけではなく、さまざまな思いを飲み込んだうえで、前向きでいるのではないかと想像する。不安や苦しみとどう向き合っているのかというところがもう少し出ていると、ドキュメンタリーとして厚みが増したと思う。

（ＮＨＫ側）

鈴木さんが強く見えるあまり、視聴者が「自分とは違う」と受け取ってしまうのではないかというおそれは、私も制作中に感じていた。弱さが表れるシーンをどのくらい番組に入れるかというのは議論を尽くして、最後の最後まで悩んだ。もう一言でも加えることによって、「私とは違う」と思う人たちに共感してもらい、より多くの人に鈴木さんの気持ちやメッセージが伝わったかもしれない。答えはないが、これからも番組に向き合ううえで考え続けていきたい。

○　鈴木さんの笑顔と、決して諦めない強じんで前向きな気持ちが周囲に広がり、たくさんの人を勇気づけている様子が印象的だった。番組ＭＣの２人がスタジオの隅に座って話していたり、テレビが黒い布の上に置かれていたが、少し寂しい雰囲気が感じられ、いつもと同じスタジオセットで収録してもよかったのではないか。

（ＮＨＫ側）

今回は情報の説明というよりも、鈴木さんの話を普遍的なメッセージとして受け取ってほしいという思いがあった。そのため、番組ＭＣのことばに集中できるような演出にしようと、

通常のスタジオセットではなくシンプルなセットにしたが、デザインや色の設計でもう少し工夫ができたかもしれない。

＜放送番組一般について＞

○　１２月８日(金)の北海道道「天才と呼ばれた男　小野伸二」(総合 後7:30～7:57 北海道ﾌﾞﾛｯｸ)を見た。幼少期や中学校時代のエピソードが取り上げられるかと期待していたが、高校時代の合宿所でのエピソードを取り上げており、いい意味で予想を裏切られた。浦和レッズでのユニホーム姿も懐かしく、当時の試合を思い出しながら番組を見ることができた。試合の中継や「ほっとニュース北海道」で引退のコメントは聞いていたが、そのほかの話もたくさん聞くことができてうれしかった。番組ＭＣの２人にはもう少し突っ込んだ専門的な質問もしてほしかった。

○　１２月８日(金)の北海道道「天才と呼ばれた男　小野伸二」を見た。序盤の高校時代を振り返るパートは、当時を知る人へのインタビューや、当時の映像にナレーションを付けていたが、表面的で内容が薄い印象を受けた。しかし、播戸竜二さんや元コンサドーレ札幌社長の野々村芳和さん、現役の小柏剛選手へのインタビューでは、それぞれのコメントが小野伸二という選手の人間性や謙虚さ、優しさをよく伝えており、小野さんがファンも含めた多くの人たちから愛され、尊敬されていることがよく分かった。本人とスタジオで一緒にＶＴＲを見るという演出からは、番組ＭＣとのやり取りも通して、小野さんの表情や本音を聞くことができた。番組ＭＣの鈴井貴之さんの話の引き出し方や、多田萌加さんのサッカー愛、コンサドーレ愛が伝わってきたのも好感が持てた。

（ＮＨＫ側）

小野さんの引退が発表されてから出演交渉を始めたが、本人から引退するまではその先の予定を決めたくないという話があり、当初は番組を制作できるかどうか見えない状態だった。引退後にできるだけ速やかに、小野さん本人の話を聞きたいと交渉を続けた。番組ＭＣの２人もコンサドーレが大好きで、小野さんもそれをよく分かったうえで出演を快諾してくれたのだと思う。スタジオ収録では、小野さんにさまざまな話を聞くことができたが、番組で届けることができたのは一部だった。まだ紹介したい話があるので、拡大版の放送を予定している。

（ＮＨＫ側）

小野さんの現役最後のシーンを道民の皆さんと共有したいという思いで、試合中継をはじめ、「ほっとニュース北海道」や「おはよう北海道」などＮＨＫ北海道の番組でさまざまな形で届けようとした。引退セレモニーの中継は、小野さんの引退が決まってから、スポーツ担当のプロデューサーがチーム側と調整し、北海道地方向けの放送が実現した。試合とセレモニーは通常の約３倍の視聴率を記録し、北海道の多くの人に見てもらうことができた。一方で、「北海道道」の視聴率はふだんを少し下回ったが、改善できる点などを見直したうえで、４５分間の拡大版として改めて放送するのでぜひ多くの視聴者に見てほしい。

○　１２月１５日(金)の北海道スペシャル「はるかなるひと～未踏峰への挑戦　野村良太のヒマラヤ日記～」(総合 後 7:57～8:42 北海道ﾌﾞﾛｯｸ)と、１８日(月)の「ヒマラヤ未踏峰への挑戦　野村良太のヒマラヤ日記」(総合 後 10:45～11:28)を見た。同じく野村さんを取り上げた、2022 年１２月放送の「白銀の大縦走　北海道分水嶺ルート 670 キロ」と同様にすばらしい景色だった。今回はネパールで村から山のふもとまでしばらく歩くので旅番組的な趣もあり、そういう面でも見応えがあった。挑戦の中で、近くに迫る危険のようなものがむき出しで、ありありと描かれているのが印象的だった。誰もができないような挑戦だからこそ、番組にする価値があるとも言えるが、安易に推奨できる行いでもないと思う。今回は危険を背負った活動であるということを野村さん自身も日記に記していて、それを番組で取り上げているので、視聴者にも考えさせるつくりになっていた。誰にでも勧められるわけではない活動をメディアが肯定的に描いて発信することの難しさを改めて考えさせられた。担当ディレクターによる撮影の裏話がウェブサイトに載っていて、髪が洗えなくて苦労した話や、交通手段であるロバのふんが乾いて粉状になって飛んでくるエピソードなど、テレビでは伝わらない話を知ることができておもしろかった。

（ＮＨＫ側）

果敢な挑戦を描くにあたって、淡々とした描写を意識した。初めの標高が低いところにいたときは野村さんも元気で、山頂へ近づくにつれて顔色が変わり、やがてしょうすいした表情になっていく、そうした表情の変化を見てもらい、簡単に挑むことのできる場所ではないのだということを結果的に感じてほしいと考えた。こうした冒険を描くときは、放送をすることがで

きない結果や事態が起こることもありうるが、今回は彼らが最終的に登頂を諦めたこと、無謀なところに踏み込まずにとどまったことで、未踏峰に挑む難しさを示してくれたと思う。

○　１２月６日(水)の視点・論点「異常気象下　求められる農業革命」を見た。番組タイトルに「農業革命」とあったのでぜひ見てみたいと思ったが、それとは裏腹に全くつまらない内容だった。気候変動があるから必然的に農業も変わらざるを得ないという概論だけで終わってしまい、具体例に一つも触れていないところが残念だった。今年の猛暑はビートなどの農畜産物に影響を与えていたが、異常気象の対策を具体的にどのようにしていくのがよいのかを掘り下げて伝えてほしい。

（ＮＨＫ側）

気候変動と一次産業とのありようというのは、ＮＨＫ北海道のニュースとしても重要なテーマの一つだと考えている。ビートについては、需要減に対応すべく牛の餌としての活用はあり得るのかという企画を放送したように、今後も重要な課題として取材を継続していく。

○　１２月１０日(日)の小さな旅「荒波を越えて　ふたたび～北海道　厚岸町～」を見た。厚岸特有の地形や海流、外洋とのつながりが美しい映像とともに紹介されており、北の海の豊かさを伝えると同時に神秘さや怖さも表しているようで印象的だった。いいことも悪いことも含めて、海から授かるものを謙虚に受け取ってきた厚岸の人々の姿を淡々と捉えることで、海の恵みの多さ、打撃の大きさが強く心に残った。赤潮でウニが死滅したように、人間もまた完全な自然をなくしては生きていけないといった、壮大なテーマを厚岸という小さな世界に凝縮して訴えかけてくる、非常に重要な番組だったと思う。今回の番組は、2021年１２月放送の北海道スペシャル「突然、海の色が変わった」で取材した人たちに再度迫る内容になっていた。このようにドキュメンタリーに出演した人のその後を伝えることで、彼らはその後も生き続けているリアルな存在なのだということを感じることができた。一つの番組が終わった後も寄り添って、時間をかけて詳細をすくい上げ続けていくべき対象やテーマがあると思うので、今後も愛情と手間をかけた丁寧な番組作りに期待する。

（ＮＨＫ側）

この番組は潜水取材に力を入れて制作した。赤潮被害を受けた後にポイントを置いて、海がどれだけ再生したかということをできるだけ海の中の映像を交えて伝えたいというのが主眼

だった。結果として、意見をいただいたように自然と人間の関わりの過酷さや恵みの豊かさが描けていたとすれば幸いである。潜水の映像についても、厚岸漁協の皆さんから「厚岸の水中映像がここまで丁寧に撮影されたことはない」ということばもあり、手応えを感じた。

○　１２月１４日(木)のねこのめ美じゅつかん「２５歩め　マティちゃんは常識破りで真っ赤っか」を見た。イラストで描かれた２匹の猫がアンリ・マティスの作品を見て、「よーく見るとヘンテコな絵だなあ。部屋の壁、真っ赤だし」といった、たあいない掛け合いをしながら番組が始まり、楽しみながら作品の鑑賞ができる作りになっていると感じた。子どもたちが美術に興味を持つきっかけになる番組であり、今後も期待している。

○　１２月１７日(日)のどうする家康「(４８)神の君へ」(総合 後 8:00～8:57)を見た。１年を通して、弱い家康が優秀な家臣に支えられて成長していく物語として楽しむことができた。家康の正室の築山殿が大がかりな和平工作を仕掛けていたという、史実にはない大胆な設定には驚いた。歴史を描く大河ドラマにおいて、史実にどこまで忠実になるのか、どこまでフィクションが許されるのかというのは難しい問題だと思う。合戦シーンを実際のロケではなく、バーチャルな映像で見せるというのも今回の特徴の一つだったと思うが、どうしても本物の迫力にはかなわないと感じた。本物と寸分たがわぬようなＣＧの映像表現が可能になるのか、そうした技術の現状や見通しにも興味を持った。北海道民としては、北海道を舞台にした大河ドラマを見たいと思う。記録として残された歴史が浅いことやアイヌ民族と和人の関係をどう描くかなど、簡単なことではないと思うが、だからこそ挑戦に期待したい。

○　１２月１８日(月)の「ヒマラヤ未踏峰への挑戦　野村良太のヒマラヤ日記」(総合 後 10:45～11:28)を見た。野村さんが登山中に頭痛に襲われたが、ここでやめると仲間に言いにくいと葛藤する中、登山ルートの状況が悪くなり、全体の総意で撤退が決まった場面からは、このときのことを「自分の一言ではなく、ルート状況という全体の総意で撤退が決まったことに安どしてしまった」や「自分は何て弱くてひきょうな人間なんだと思い知らされた」とつづった野村さんの日記に感動するとともに、登山と人生には通ずるものがあると感じた。インターネットで何でも調べることができる今の世の中で、未知の分野を知るということや、困難に直面する経験が人生にとって大きな影響を与えるのだと考えさせられた。

○　１２月１８日(月)の「ヒマラヤ未踏峰への挑戦　野村良太のヒマラヤ日記」を見た。

登頂は成功したのか、それとも登頂できなかったのかといったような結論を引っ張る演出が一切なかったのがよかったと思う。登頂できるのかという興味より、この人たちは大げんかを始めるのではないか、いつ仲間割れしてもおかしくないといった緊張感があり、番組に引き込まれた。桐谷健太さんのナレーションは仰々しくなく、落ち着いた低い声で番組の内容に非常に合っていた。出色なのは登山中に野村さんに頭痛の限界が来たという場面である。体調不良でこれ以上先に進まないほうがいいかもしれないと葛藤する中、装備を整える必要があってベースキャンプに戻ることになり、野村さんの体調が理由ではなく、ルート状況という全体の総意で撤退が決まったことに安どしてしまったという、この一連の野村さんの日記の文章がすばらしかった。今後の野村さんのチャレンジも見てみたい。

（ＮＨＫ側）

2022 年１２月放送の「白銀の大縦走　北海道分水嶺ルート 670 キロ」では、北海道の縦の分水嶺 670 キロを踏破するという内容で、野村さんは当初は撮影しながら冒険することに慣れていなかったが、撮影技術が上達していき、すばらしい映像を撮影できるようになった。そこで、今回の未踏峰登山の挑戦もぜひ取材したいとお願いをして番組につながった。野村さんが自身のことを非常に率直に丁寧に記録した日記も大変すばらしかったので紹介させてもらうこととした。私たちの取材チームが撮影できる地点には限界があり、その先はすべてパーティーの皆さんに撮影してもらったが、その中で 360 度カメラが力を発揮した。出演者の協力や技術的な部分など、さまざまな要素が組み合わさって完成した番組だと思う。

○　１２月１９日(火)のクローズアップ現代選「パソコン界の先駆者　そのベンチャー精神に迫る」(総合 前 2:22～2:47)を見た。スティーブ・ジョブズを取り上げており、アメリカの景気が悪かったときでも彼が時代の変化を見据えていたことが分かった。一方で、２０日(水)の「ＮＨＫニュース　おはよう日本」のリポート「おはＢｉｚ」で、水素による燃料電池の最前線について紹介していたが、せっかくの国内技術を生かし切れず、経済発展に繋げることができない日本経済の中途半端さを感じた。番組を通して、産業界の人たちにも同じてつを踏まないような発信ができたら、また違ったブレークスルーが起こるのではないかと思う。過去の番組を今になぞらえて見るのは非常におもしろく、「クローズアップ現代」のアンコール放送は意義深いと感じた。

（ＮＨＫ側）

「クローズアップ現代」が今年３０年を迎えるタイミングで、傑作選としてアンコール放送を行った。2025 年には放送 100 年という節目も迎える。今後も過去の番組をアンコール放送する機会を作っていきたい。

○　１２月１９日(火)のプロフェッショナル　仕事の流儀「壁が、壁でなくなるように～研究者　落合陽一～」(総合 後 7:57～8:41.30)を見た。落合さんはＣｈａｔＧＰＴやＡＩの活用など、研究者として非常に優れているという認識を持っているが、番組ではふだんあまり見ることができない一面も見ることができた。「プロフェッショナル　仕事の流儀」は、既に有名な人にも、そうではない人にも迫っているが、こうした著名人のふだんとは違う顔や実際の考えを取り上げる、すばらしい番組と思う。

○　１２月７日(木)まで放送していた「【夜ドラ】ミワさんなりすます」を見た。第１話から最終話まで、ドラマチックな展開にときめきながら楽しく見ることができた。有名映画のオマージュともいえる演出が満載で、細部まで目が離せなかった。主題歌もメロウな曲調がドラマにふさわしかったと思う。

○　１２月１７日(日)の「どーも、ＮＨＫ」を見た。ＮＨＫの稲葉延雄会長と東京大学の藤井輝夫総長の対談はテーマが多岐にわたり、興味深かった。マイクロプラスチックの問題についても言及しており、今後の番組で詳しく取り上げることを期待している。ＮＨＫと東京大学という社会全体に開かれた重要な役割を担う機関が包括連携協定を結んだのは大変有意義なことだと思うので、今後に注目したい。

ＮＨＫ札幌放送局
番組審議会事務局

２０２３年１１月ＮＨＫ北海道地方放送番組審議会

１１月のＮＨＫ北海道地方放送番組審議会は、１５日(水)、ＮＨＫ札幌放送局において、１０人の委員が出席して開かれた。

会議は、委員長の司会により開会。議事に先立ち、札幌局長から令和５年地上基幹放送局の再免許にあたっての総務大臣の要請の紹介とあいさつ、北見局長からあいさつがあり、議事に入った。

議事はまず、北海道道「氷都からアイスホッケーの“灯”が…」をはじめとして、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、１２月の番組編成の説明と放送番組モニター報告、視聴者意向報告が行われ、会議を終了した。

(出席委員)

委 員 長	金山　準	(北海道大学大学院ﾒﾃﾞｨｱ･ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ研究院　教授)
副委員長	笹森　琴絵	(酪農学園大学　農食環境学群特任准教授)
委　　員	伊藤　翔太	(株式会社トリプルワン　代表取締役)
	乾　　ルカ	(小説家)
	鹿又百合子	(ｉｄ．ＤＥＳＩＧＮ－ＯＦＦＩＣＥ　代表)
	清水　貴子	(地酒のまるしん商店　店長)
	鍋谷　雪子	(株式会社Ｎａｂｅｙａ　専務取締役)
	樋口　貴広	(株式会社環境テクノス　代表取締役)
	蛭川　隆介	(北海道新聞社　論説主幹)
	前田　茂雄	(前田農産食品株式会社　代表取締役社長)

(主な発言)

＜北海道道「氷都からアイスホッケーの“灯”が…」
(総合　１０月２７日(金)後7:30～7:57)について＞

○　アイスホッケーがいかに釧路において、地域に根ざしたスポーツであるかが分かると同時に、プロスポーツとして支えていくことの厳しさを知ることができた。課題自体が現在進行形で、かつ非常に難しいテーマだが、あえて番組として取り上げたところにＮＨＫのチャレンジ精神を感じた。地元チーム存続のためには企業や団体からの支援が必要だというメッセージは理解できたが、番組中に使われていた「対立構造」

ということばが、何の対立を指しているかがよく分からなかった。

（ＮＨＫ側）

「ひがし北海道クレインズ」というチームが財政的に立ちいかない中で選手が抜け、別のチームとして「北海道ワイルズ」を立ち上げた。構造としてはクレインズとワイルズの対立となるのだが、クレインズはほとんど消滅状態であるため、その対立を描くのは難しかった。スタジオでの補足説明など、より丁寧に伝える方法があったかもしれない。

（ＮＨＫ側）

地元の放送局としては、報道で取り上げられる機会が多いワイルズと機会が減少しているクレインズ、それぞれの主張をできる限りバランスを取って、取り上げたいと考えていた。釧路の人々にもさまざまな思いがあり、選手には同情しても、ワイルズという新チームに対しては思いが高まっておらず、クレインズがなくなることを寂しく思う人も多い。そういう意味では、選手とクレインズとの対立、そしてワイルズとクレインズの対立という構造があると思うが、「対立構造」ということばだけでは伝わりづらかったかもしれない。

○　企業が地域から撤退し、関連産業や人々の生活環境が変化する中で、町のシンボルとなっていたスポーツチームをどう変革していかなければならないのかというのは、ほかの自治体も抱えるテーマであり、今回の放送は非常に意義深いと感じた。チームを支えた企業の撤退、それによる周辺産業や関係者の人生模様の変化、チームの経営難、解決の糸口となる事例紹介というように、シリーズで放送しても地域教材として興味深いものになると思った。

○　多くの問題が絡み合っているため、取り上げ方が非常に難しい話題だと思ったが、各方面の声をきちんと取り上げて、特定の意見や立場に偏ることなく伝えていた。「地域からアイスホッケーという文化がなくなるかもしれないという危機感、それを地域の方と一緒に考えていきたい」という番組ＭＣのことばでうまくまとまっており、非常に考えられている構成だと感じた。

○　クレインズが破綻に至った経緯が、決算資料や当時を知る関係者の話などで分かりやすく描かれていた。東京や愛知の企業経営者がワイルズに出資しているという話が

あったが、東京や愛知の人がなぜ釧路のアイスホッケーチームに手を差し伸べる気になったのか、その事情と今後の展望を知りたかった。アイスホッケーのアジアリーグの歴史というのは、ある意味で北海道に関わりのある企業の盛衰の歴史でもあるので、その部分を振り返るとさらに興味深い内容になるのではないかと思った。

（ＮＨＫ側）

東京や愛知の企業経営者たちは、釧路との縁があまり深くはなく、どのようなモチベーションでチームを応援するかという問題があったのだが、この部分を詳しく描こうとすると、ほかのアイスホッケーチームも含めた、さまざまな問題に話が及ぶため、今回は地域の中でプロスポーツを残していくにはどう考えていけばよいかという点を掘り下げることに注力することとした。支援の在り方という点では、もともと大手企業のスポンサーがつき、観客の動員も含めて幅広い支援があって成り立っていたスポーツが、スポンサー企業が去ったとき、地域とプロスポーツがどのように関わっていくのかという点が大きな問題になると思う。今回はチームの分裂ということもあり、ファンももろ手を挙げて新チームを支援できる状態ではなく、地元で支援できる企業があるわけでもなく、さらに行政が関わるには財政的に弱いというところがある。こうした中で、地域がプロスポーツを支えるにはどうすればよいのか、今のところ明確な答えはないが、課題として取り上げたところに今回の番組の意義があると考える。

（ＮＨＫ側）

ワイルズに出資した企業が釧路の経済界や地元になじんでいないというのが現状だが、釧路の人々が安心してチームを応援するには運営の透明度の高さが求められる。クレインズのほうが釧路の人々になじみ深い中で、これからワイルズがいかに経済界、行政、地域のファンから支援を得られるのかという点を今後も地域放送局として取材していく。

○　釧路ではアイスホッケーが非常に身近であることを知ると同時に、町の誇りだったクレインズの現状を知るほどにやるせない気持ちになり、根本的な原因や回避するための方法を考えさせられる番組だった。一方で、アジアリーグの姿勢と対応に疑問を抱いた。加盟チームが危機的状況に置かれている中で、リーグが何かしらの措置を講

じてもいいのではないかと感じたので、ほかのスポーツの事例も知りたいと思った。

○　多くの関係者に取材できていたのが印象的だった。特に、クレインズの代表には釧路市ですら連絡が取れていないと聞いたが、行政もコンタクトが取れないところに少しでも取材ができていた点に感心した。アジアリーグは「資金見通しに基づき、近々解消の見込みであることをリーグとして確認した。リーグ参戦の準備についても特段の問題がない」という声明を出していたが、番組でのチェアマンへのインタビューでは、「リーグとして出来たことはないか？」との問いかけに対し、「基本的にチームの経営に口出しをしない」という回答にとどまっており、もう少し掘り下げた取材をしてほしかった。最後に番組ＭＣが「一プロスポーツクラブの問題というよりは、地域の問題として受け止めたほうがよい」と締めくくっていたが、チームや地域のほかに、アジアリーグの問題でもあるということを付け加えてほしかった。

○　コロナ禍の３年間がさまざまな形で爪痕を残していることや、クレインズを支えていた大企業の釧路からの撤退、物価高騰など、さまざまな時代背景の変化、応援する側の価値観、スポーツ競技団体との関わり方の変化に気付かされた。番組ＭＣが最後に「地域の問題」だと締めくくっていたが、「これからこういう風に釧路でアイスホッケーをやっていきたい」、「応援をよろしく」というように、選手による前向きなまとめ方をしたほうが、視聴者が「応援しよう」という気持ちになり、関わる糸口が生まれるのではないかと思った。

○　ワイルズがリーグに加盟するためには、リーグの一員であるクレインズの了承も必要であるため、ワイルズが嘆願書の中でクレインズの除名を求めたという場面があったが、所属する選手がおらず、事務所も空になっているクレインズがなぜ投票権を持ってリーグに残っているのかについて詳しい説明がなく、よく分からなかった。ほかにも、取材の時系列が明示されておらず話についていけない場面や、選手の発言に出てくる指示語の補完が不十分だと感じる箇所など、全体的に分かりづらい部分が多かった。考えれば分かることではあるのだが、少しの補完で済むことを考えれば分かることだと視聴者任せにするのはいかがなものかと思った。

（ＮＨＫ側）

指摘のあった部分は、詳細に踏み込むと説明が多くなり、全体として伝わりにくくなる面があったので、あえて最低限の説明にとどめたが、複雑な問題を語るときにどのような伝え方をするべきかは今後の課題としていきたい。

○　釧路のプロスポーツチームのすう勢を通して、選手たちの苦悩だけでなく、行政と企業の本音と建前、希望と挫折、欺まんと信頼、理想と現実など、たくさんの要素が絡んで、複雑な人間模様やさまざまな思いが誠実な目線に基づくインタビューによって浮き彫りにされていた。釧路市スポーツ課の課長とアジアリーグのチェアマンが「できることは限定される」あるいは「限定的にならざるを得ない」と同じようなことを言っていたが、釧路市の課長の表情には苦渋がにじんでいた一方で、アジアリーグのチェアマンは感情を排除した淡々とした表情で語っており、両者の違いが際立っていたのが印象的だった。異なる背景や立場の人が多く登場したので全体的に混沌としており、細かい部分で多くの疑問が残った。クレインズの関係者が顔と声を伏せて出てきた場面では、その人が経営者側なのか、選手側なのか、発言からも推測しがたく分かりにくかった。

（ＮＨＫ側）

アジアリーグのチェアマンの発言について補足の説明をしたい。リーグはチームのオーナーが集まって構成されているため、各チームに対してあまり発言できる権限がなく、踏み込んだ介入は難しいところがある。こうした前提をもっと伝えても良かった。顔と声を伏せて取材に応じたクレインズの関係者が経営側なのか選手側なのかという点だが、経営側の人物は非常に少なく、経営側であることを明示したり、もう少し細かい情報を付けたりするだけで、顔を隠しても誰なのか特定できてしまう可能性があったため、表現に配慮した。

○　問題が非常に複雑なため、番組の視聴だけで全貌を理解するのは難しかったが、ＮＨＫ北海道のホームページでこれまでの報道が時系列順にまとめられており、非常に分かりやすかった。番組では、経営側だけでなく釧路市やリーグといった関連団体の他人事的な態度を浮き彫りにしていると感じた。地方都市と経済、必ずしもメジャーではないスポーツという複数の問題が絡み合った現代的な問題を取り上げた、見応えのある内容だった。コロナによる影響や競技人口の減少といった課題は、他のチームも抱えていると思うが、なぜクレインズがこのような事態になっているのか、他のチームの現状や、そもそもアジアリーグはプロリーグとして成り立っているのかなども知りたかった。

＜放送番組一般について＞

○　１０月３１日(火)の「ほっとニュース道央いぶりＤＡＹひだか」のリポート「物価高で影響受ける子ども食堂」を見た。室蘭市のＮＰＯ法人が運営する子ども食堂が紹介され、慢性的な資金不足や人手不足、ボランティア任せの運営といった実情を伝えていた。神門光太朗アナウンサーの「物価高の影響は弱いところに出てくる。より多く、より強く大きな形での支援を考えていかなければならない」というコメントは全くそのとおりだと思った。今後も各地にあまたある運営組織の声を恒常的に伝えるとともに、一般の視聴者にできることも含めて教えてほしい。

（ＮＨＫ側）

ＮＰＯ法人による子ども食堂の運営は、これまでも厳しい状況であったが、さらに物価高がのしかかってきている。この数年で、全国的にも子ども食堂を取り上げる機会が増えたと感じる。今後も社会的に弱い立場の人たちをどう支えていくかという観点で報道していく。

○　１１月１０日(金)の北海道道「栗山英樹が語る　北海道野球伝来１５０年」(総合後 7:30～8:28 北海道ﾌﾞﾛｯｸ)を見た。野球を通して、北海道や日本の歴史の一面を見るような感覚で楽しむことができた。番組表やネットの評判を頼りに目星をつけて、見たい番組だけを見るという視聴スタイルが多くなっている中で、例えば野球に関心のない視聴者がこのようなすばらしい番組に偶然出会い、約１時間の長時間を視聴するという可能性は非常に低いと思う。現代の人たちはどのような経路でよい番組に出会うことができるのか、知りたいと思った。

（ＮＨＫ側）

視聴習慣の変化でテレビ番組をリアルタイムで見てもらうというのはなかなか難しく、視聴者があらかじめ見たいと思って録画する場合や、ＮＨＫプラスで配信しているものを見ていただくことが増えている。そうした状況は私たちも危機感を持っており、テレビだけでなく、デジタルツールなどでの番組告知や情報発信にも取り組んでいる。

（ＮＨＫ側）

テレビのリアルタイム視聴低下はさまざまな調査データからも明らかになっている。より多くの人に番組を視聴してもらうには、ＳＮＳやウェブサイト、動画プラットフォームといった多様な回路でコンテンツやＮＨＫの存在自体を知ってもらう

ことが必要であり、全国的に課題意識を持って、さまざまな取り組みを試みている。

○　１１月１１日(土)のＷｉｌｄ　Ｈｏｋｋａｉｄｏ！「藻琴山　絶景！雲海ハイキング」を見た。専門的であるのに気軽に見ることができ、実際にその場所に行った気分になれる番組である。海外の人がオホーツクの情報を知りたいと思うとき、どのようにしてこの番組にたどり着けばよいのかと思った。海外の企業とつながったり、道庁が運営する海外向けのサイトに掲載することでアクセスできるようになると、番組がもっとうまく活用されると思う。北海道に住む私たちも、この番組を通して地元の美しさを再発見することで誇りを持つことができ、インバウンド対策も他人事ではないと捉えることができると感じた。

（ＮＨＫ側）

国際放送局のホームページでは、この番組の放送回を多数掲載している。ホームページには本編よりも短い尺のビデオクリップも掲載しており、気軽に見たり共有したりできるようにしている。アドベンチャートラベルに興味のある海外の人たちにもっとこの番組に触れてもらえると、あまり知られていないが、豊かな自然がある場所を知ってもらう機会になると思う。

○　１１月１１日(土)のＲｅＮｅｗｓ北海道「カーリング」(総合 後 4:35～4:40 北海道ﾌﾞﾛｯｸ)を見た。撮りためた映像とニュースタイトルで使われたことばをかけ合わせて時代ごとに見せるという手法がユニークで興味深く、北海道でのカーリングの系譜を楽しみながら知ることができた。

（ＮＨＫ側）

「ＲｅＮｅｗｓ北海道」はテレビ放送開始７０年を機に、公共の財産ともいえる、ＮＨＫ北海道が持つ過去のニュース映像を活用した番組ができないかということで立ち上げた企画である。過去の映像を単にもう一度放送するのではなく、キーワードからその時代を読み解くことを通して、北海道の新たな姿やそのことばが持つ北海道における意味の変遷を伝えている。

○　９月１７日(日)の空からクルージング「ヨーロッパの世界遺産空の旅」(総合 後1:45～1:50)をＮＨＫプラスで見た。画面の上部と左側に終始、関東地方の熱中症警戒に関するテロップが表示されていた。関東地方の熱中症警戒に関する情報は、北海

道で視聴する人には必要のない情報であり、内容的にもこのテロップがない映像をしっかり見たかった。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫプラスの表示に関しては、これまでも全国各地からご意見をお寄せいただいており、以前は東京で放送した映像を「速報スーパー」や「Ｌ字」含めてそのまま配信していたが、こうした情報を外して配信するよう改善した。地域局の配信については改善できておらず、引き続き本部に働きかけていきたい。

○　１０月１３日(月)のドキュメント２０ｍｉｎ.「空想地図サミット」をＮＨＫプラスで見た。空想地図作家が作った架空の町の地図を見ながら、地図や都市の専門家たちが気ままに論じ合うという内容だった。内容のおもしろさは期待したほどではなく、空想地図というテーマ自体がおもしろいため、そこに内容が負けてしまったように感じた。「世の中には空想地図に魅せられた男たちがまだまだいる」というナレーションがあったが、「女で魅せられた人はいないのか」といった余計な誤解を招きかねない表現であり、再考の余地があると思った。

○　１０月２１日(土)のＮＨＫスペシャル「超・人手不足時代～危機を乗り越えるには～」を見た。人手不足の現状と課題、そして解決策が分かりやすくまとまっており、見応えがあった。課題解決の事例として神奈川県の旅館のシステムが紹介されていたが、規模が大きく、もう少しハードルが低く取り組みやすい例が道内にたくさんあるのではないかと感じた。今後、道内局でこのような話題を扱った番組を制作する予定があるかを聞きたい。また、今回は「日曜討論」との共同企画でＱＲコードから番組ホームページへの誘導を図っているのが印象的だった。この取り組みが、「日曜討論」の視聴率や番組の評価など、目に見える形で効果があったのかが気になった。

○　１０月２１日(土)のＮＨＫスペシャル「超・人手不足時代～危機を乗り越えるには～」を見た。帯広の企業が２社取り上げられていたが、なぜ帯広が選ばれたのかと思った。問題解決の事例として紹介された、ＡＩを使ったバス運行システムは取り上げるに値すると思ったが、その経営に携わる人が「ＮＨＫスペシャル」と「日曜討論」の両番組にコメンテーターとして出演することについて、公平性に疑問を抱く視聴者もいたのではないか。今回は触れていなかったが、人手不足の問題を語るうえで、外国人労働者の話題は欠かせないのではないかと思う。

（ＮＨＫ側）

帯広を取り上げたのは、エッセンシャルワーカーの需要と供給のミスマッチが顕著に表れている地域であり、そのような問題がさまざまな分野で見られたためである。この取材を通して改めて問題の深刻さが分かったので、今度も取材を継続していく。

（ＮＨＫ側）

帯広を取り上げたのは、人口が１６万人で、農業という一大産業もあるような地域でさえ、ここまで人手不足が深刻になっているということを一つの都市に焦点を当てることで同時多面的に見られるのではないかというねらいがあった。“2024 年問題”が来年４月に本格化する中で、引き続き現状や課題解決につながる北海道の動きを取り上げていきたい。

（ＮＨＫ側）

「ＮＨＫスペシャル」の中で表示したＱＲコードを契機に「日曜討論」を視聴した人がどのくらいいるのかなどは推し量ることができない。視聴率は番組の指標の１つとして日頃から活用しているが、数字の高低だけで番組のクオリティや視聴者の満足度が図れるものではなく、外的要因も踏まえながらさまざまな分析を行っている。

○　１１月９日(木)の所さん！事件ですよ「納骨堂が経営破綻！？人気の“お墓”に思わぬ落とし穴」を見た。テーマとなった“お墓”というのは、誰しもが関係する事柄にも関わらず、これまでは家族間でも話しづらく、テレビでも多くは取り上げられていなかったように感じるが、この番組はお墓について家族で話し合えるきっかけになるような回だと感じた。海外の最先端のお墓事情も取り上げていたが、日本と海外ではお墓に関する事情が全く異なるので、もっと国内の事情に焦点を絞ってほしかった。これまで日本でタブー視されていた部分に注目することは社会的に必要であり、今後もＮＨＫが率先して、あまり触れられてこなかった話題をテーマに番組を作ることを期待している。

○　１１月１３日(月)の市民Ｘ「謎の天才『サトシ・ナカモト』」(総合 後 10:00～10:44)を見た。ビットコインが非常に優れた技術であることや、その開発者が日本人かもしれないということをさまざまな関係者が期待やロマンを感じていることがインタビュー形式で語られていた。インタビューは各々撮影されているのだが、話者が円卓

に集い、あたかも同じ場所で語り合っているように見せる演出が未来的で非常によかった。

○　１０月２３日(月)のプロフェッショナル　仕事の流儀「エレン・イェーガー　スペシャル」(総合 後11:45～前0:04.30)を見た。番組史上初となるアニメの主人公にインタビューをするというＮＨＫの野心的な挑戦に胸が躍った。アニメの描写をうまく切り取って、主人公の心の葛藤や残酷さ、戦いのさまがよく描かれていた。これを機に、国民的アニメの主人公にインタビューするといったシリーズをこの番組で放送することで、視聴者層の広がりなどにつながる可能性があると感じた。

○　近頃、生成ＡＩを使って、政治家が話していない内容を話したかのように見せる悪質な偽動画がＳＮＳで広まっている。生成ＡＩの普及とともに、今後もこうした偽の画像や動画の流布が多くなっていくと思うが、ＮＨＫとしての現時点での対策があれば聞きたい。

（ＮＨＫ側）

ＳＮＳ上などで飛び交う情報を参考にして取材を始めたり、ニュースや番組内で実際にその映像を使ったりということは、事件や事故、災害の発生の端緒をつかむという意味でも欠かせない取り組みになっており、出どころや映像自体のオリジナリティの確認は力を入れて行うようになっている。ＡＩの精度が上がり、巧妙さを増しているので、今後も研究を続け、信頼に足るメディアの情報ということが揺らぐことがないようにしっかり取り組んでいかなければならない。

ＮＨＫ札幌放送局
番組審議会事務局

２０２３年１０月ＮＨＫ北海道地方放送番組審議会

１０月のＮＨＫ北海道地方放送番組審議会は、１８日(水)、ＮＨＫ札幌放送局において、１０人の委員が出席して開かれた。

会議は、委員長の司会により開会。議事に先立ち、札幌局長と室蘭局長からあいさつがあり、議事に入った。

議事はまず、北海道道「馬産地応援　ようこそ！あなたの知らない“ウマの世界”へ」をはじめとして、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、１１月の番組編成の説明と放送番組モニター報告、視聴者意向報告が行われ、会議を終了した。

(出席委員)

委 員 長	金山　準	(北海道大学大学院ﾒﾃﾞｨｱ･ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ研究院　教授)
副委員長	笹森　琴絵	(酪農学園大学　農食環境学群特任准教授)
委　　員	伊藤　翔太	(株式会社トリプルワン　代表取締役)
	乾　　ルカ	(小説家)
	鹿又百合子	(ｉｄ．ＤＥＳＩＧＮ－ＯＦＦＩＣＥ　代表)
	清水　貴子	(地酒のまるしん商店　店長)
	鍋谷　雪子	(株式会社Ｎａｂｅｙａ　専務取締役)
	樋口　貴広	(株式会社環境テクノス　代表取締役)
	蛭川　隆介	(北海道新聞社　論説主幹)
	前田　茂雄	(前田農産食品株式会社　代表取締役社長)

(主な発言)

＜北海道道「馬産地応援　ようこそ！あなたの知らない“ウマの世界”へ」
(総合　１０月６日(金)後7:30～7:56)について＞

○　声優をキャスティングすることで親しみやすく、馬に詳しくない人にも分かりやすい内容だと感じた。静内農業高校の学生と馬との関わりを取材した場面は北海道ならではで、一歩踏み込んだ情報だったと思う。北海道の人が見るべき内容の番組だと感じた。

○　厳しい状況に置かれている生産者の実情も紹介してほしかった。静内農業高校の学

生と馬との関わりを取り上げていたが、昨年放送した日高地方を取り上げた番組でも同じように紹介していたので、既視感を覚えた人もいると思う。スタジオに出演していた白崎義彦アナウンサーは競馬の実況歴が長いが、競馬について扱った番組だったにも関わらず、経歴について詳しく紹介していなかったことは残念であり、白崎アナウンサーの競馬への思いも聞きたかった。

（ＮＨＫ側）

白崎アナウンサーの紹介は番組の長さの都合でカットしたが、競馬には大きな思い入れがあり、実況にも定評がある。名前を紹介するスーパーの文言など、伝え方にもっと工夫の余地があったかもしれない。

○　現役を引退した後の預託先など、競走馬が抱える問題にはまったく触れずに、競馬の明るい面、よい面のみを伝えていたように感じた。一方で、「馬産地応援」ページでは引退馬についても触れており、興味深い内容になっていた。名前を紹介するスーパーで、一部の出演者についてはいつもの番組のデザインとは異なり、馬のモチーフを取り入れていたのは今回の番組テーマと合わせていて、非常によい演出だと思ったが、他の出演者など全体的にそのデザインに統一したほうがよかった。

（ＮＨＫ側）

競馬を巡るさまざまな課題があるなか、何を主軸に伝えるかを徹底的に議論し、「馬産地を応援する」ことを一番の目的として番組を制作した。馬ブームを陰で支える馬産地・北海道では生き生きと仕事に励む人がいること、一方で人手が不足している現状を一人でも多くの人に伝えたかった。ゆえに入門編のような内容となり、奥深い競馬の世界を深く掘り下げられていない部分もあったと思う。幅広い人に見てほしいという思いから、番組冒頭の演出を変えたり、クイズ形式を取り入れたほか、出演者の名前スーパーのデザインを通常とは異なる形にした。

○　明るくてテンポがよく、視聴者を飽きさせない工夫が多くなされていた。競走馬についての情報と、馬に関わる人々の役割や思いが２６分の中に分かりやすくまとまっていた。視聴者が馬産地や競走馬をどのような形で応援できるのかも具体的に知りたいと思った。

（ＮＨＫ側）

どのようにして応援できるかというのは難しい部分でもあるが、取材を進める中で「北海道が馬の産業を支えているということをまずは知ってほしい」、「若い人たちに魅力ある産業として見てほしい」という馬産地の人たちの思いを聞いたので、番組やウェブ記事でそのメッセージを伝え、馬産地について「知る」きっかけになればという思いで制作した。

○　世界に通用する馬産地の日高で、競走馬がどのように生まれ育つのか、産業を支える人々の姿とともによく描かれていた。静内農業高校の地域ならではの授業風景は、北海道の産地としての強みや歴史を表していた。「北海道道」は番組を視聴することで、北海道が産地として非常に魅力があるということを知ることができるので、中高生や大学生の教材としても適していると思う。

○　馬について詳しくない視聴者にも分かりやすい番組になっていたが、北海道に馬が多く、中でも日高が馬産地となった理由や歴史など、もっと根源的な部分も知りたかった。静内農業高校を取り上げたことは、子どもの数が減少している中で、地方の学校の存在を知ってもらうという意味でもよかったと思う。

○　放送時間に対して内容が盛りだくさんだったため、全体として表面的な紹介で終わってしまった印象を受けた。静内農業高校の学生たちを取り上げたパートだけでも１本の番組ができるような内容であり、もったいないと感じた。番組の中盤で、生産、育成からレースまでの流れを紹介していたが、競馬や競走馬を知ってもらうのにとても分かりやすい内容だった。

○　今回の「北海道道」は、クイズなどを取り入れた番組の構成や声優のキャスティングから、社会現象になったウマのゲームやアニメが好きな人たちや中高生をターゲットにしていると感じた。「北海道道」のふだんのターゲット層はもう少し年齢が上だと思うが、そのギャップをどのように考えて制作したのかを聞きたい。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫへの接触がふだんは少ない若年層を中心に、幅広い年齢層の人たちに見てもらいたいという意識を持って番組を制作した。１０代の人たちにふだんより多く見てもらうことができたが、だからこそ、産業、文化として馬産地があり、そこには光と影の部分があるということをしっかりと伝えたほうがよかったとも思う。

○　競走馬は馬本来の習性や能力を変えることが前提となっており、動物としての馬、競走馬、競馬というそれぞれの面があるにも関わらず、すべてを一緒のものとして扱っていることに非常に違和感を覚えた。競走馬の扱いについては長い間物議を醸しており、競馬が恒久的に抱えている問題について、ウェブ記事では掲載していたが、番組でもしっかりと伝える必要があったのではないか。競馬に対する評価が分かれている以上、問題に触れずに応援だけを呼びかけるのは公正ではないと感じた。番組を制作するうえで、競走馬の置かれた現状をどのように認識しているのか、また、誰に向けて馬産地応援を訴えたかったのかを知りたい。

（ＮＨＫ側）

競馬という文化が包含する問題については、中心となって取材した職員をはじめ、スタッフ全員で共有し、どのように伝えるかを議論した。結果として、２６分の番組内で触れることができなかったため、番組からの誘導をしっかりと行うことで、ウェブ記事やミニ番組で扱うこととした。競馬や馬産地が持つ課題を取り上げたうえで、明るい部分を語る構成のほうが馬や競馬の魅力がより伝わったと思う。誰に向けたものかという点では、幅広い層の人たちに番組を見てもらうことで訴えることを意識した。

○　番組では競馬の明るい部分のみを強調して取り上げていたことで、その裏側にある暗い部分を逆に想像してしまった。馬産地である北海道で放送する番組としては、馬と人間の複雑な関係などの面にも触れられていたらよかったと思う。静内農業高校の学生たちは馬と非常に近いところで接しているため、そのことばは興味深いものであり、娯楽として消費する人とは異なる観点を持っていることが伝わってきた。

（ＮＨＫ側）

競馬には賭け事という面もあり、ＮＨＫで取り上げることに賛否両論あるが、地域の文化や産業という面から応援しようという思いで、室蘭局の職員が提案して取り組んでいる。競馬を取り巻く課題については、ウェブ記事だけでなく番組内でも伝えるべきだったかもしれない。一方で、明るい面を見せたことで結果的に幅広い人に番組を見ていただけたのではないかとも感じている。さまざまな伝え方がある中で、ＮＨＫのスタンスや軸を視聴者や地域の人に納得してもらえるようなコンテンツ

展開ができるように今後も努めていく。

＜放送番組一般について＞

○　９月２３日(土)のＷｉｌｄ　Ｈｏｋｋａｉｄｏ！「知床半島　　横断サイクリング！」を見た。知床の自然をその土地に詳しい外国人が分かりやすく簡潔に紹介していて、気楽に見ることができた。国際放送の海外向けの番組に日本語字幕をつけているとのことだが、英語による表現もナレーションがゆったりとしていて分かりやすかった。英語に触れながら、文化や芸術、風習、食などの日本の文化を学べる番組はおもしろいと思う。

（ＮＨＫ側）

「Ｗｉｌｄ　Ｈｏｋｋａｉｄｏ！」は、国際放送で英語のナレーションで放送したものに日本語字幕をつけて放送している。今後は、アドベンチャーを楽しむ様子だけでなく、自然の歴史的な背景も含めて伝えることで、実際に行ってみたいと視聴者に思ってもらえるようなコンテンツも目指していきたい。

○　１０月２日(月)から６日(金)の「ほっとニュース道央いぶりＤＡＹひだか」を見た。いつもはスタジオから出演しているメインキャスターの２人がこの週は交代で中継先から放送していた。この週は機会が少なかったが、坂井里紗キャスターの食に関するリポートはいつも非常にすばらしく、感心して見ている。

（ＮＨＫ側）

１０月２日からの１週間は「後志ＧＯ！ＧＯ！５号線」と題した中継シリーズを連日放送した。メインキャスターの２人がスタジオから外に出て、坂井キャスターとともに伝えた。坂井キャスターはふだんから道央圏を中心に取材や中継を担当しており、引き続き期待してほしい。

（ＮＨＫ側）

食に関するリポートは非常に難しいが、坂井キャスターの絶妙なことばづかいや表情など、醸し出す雰囲気が相まって、魅力的に伝わっていると思う。

○　１０月６日(金)の道北オホーツクスペシャル「あなたの町の映像アルバム　旭川編」(総合 後 7:57～8:25 道北･ｵﾎｰﾂｸｴﾘｱ)を見た。前半は旭川の映像で、後半は江丹別の入植当時の様子を放送していた。時代が変わっても変わらない大切なことを感じさせてくれる内容だった。江丹別の場面では、厳しい自然環境の中に入植して生き抜いてきた先人たちの苦労と、未来へつながるような若い世代の取り組みが見て取れて、ふるさとを誇れるような内容だった。

（ＮＨＫ側）

地域のアーカイブス映像をその地域に住んでいる人が一緒に見ることで、当時の情報を付加しながら展開していく構成は巧みだと思う。こうした番組を通じて、地域の人たちがその地域の歴史や歩みを振り返り、現在につながるきっかけとなるとよいと考えている。

○　１０月１３日(金)の北海道道「覚悟～大黒摩季　３２年目の北海道ツアー～」(総合 後 7:30～8:15 北海道ﾌﾞﾛｯｸ)を見た。大黒さんがステージに挑む姿や、ライブで元気づけられるファンのエピソードが非常に感動的だった。ディレクターが「ここまでして歌う理由は何か」と涙声で大黒さんに問う場面は、声の震えからディレクターの心情も伝わり、一層心に響くシーンだった。

（ＮＨＫ側）

この番組は３年目のディレクターが制作した。経験が少ないゆえに、初めは取材に非常に苦労したが、長期間取材をする中で徐々に踏み込んだ場面を撮影させてもらえるようになり、病室でのインタビューにもつながった。取材者は本来であれば感情を抑えてインタビューをするのが基本だが、ディレクターの若さゆえに涙声で取材する場面もあった。しかし、だからこそ大黒さんが心を開いてくださったのかもしれず、さまざまな化学反応が起こった番組だと思う。

○　１０月１７日(火)の「ほっとニュース北海道」を見た。函館の市営市場でのスルメイカの取扱量がピークの１％に激減しているというリポートを放送していた。データによる説明や不漁により苦しむ人々、養殖への挑戦を紹介していたが、函館の漁業が海水温の変化による漁場の移り変わりなどに、どのように対応しているのかということも知りたかった。

（ＮＨＫ側）

多くの魚種が不漁となる中、生産者は養殖なども含めてさまざまな工夫をして取り組んでいる。温暖化や数十年に一度の魚種転換など、不漁の要因は多く語られ、完全に特定されていないが、道内各局の記者も問題意識を持って取り組んでおり、今後も継続して取材していきたい。

○　「ほっとニュース北海道」のメインビジュアルは、北海道らしさが欠けているように感じる。山や流氷など、実際の地域の景色がイラストに入っていると、より地域への愛着が湧くのではないかと思う。

○　９月２３日(土)のレギュラー番組への道「危険なささやき」を見た。旧統一教会の元信者が入信した理由や過剰な資金集めに身を投じた経緯を、裁判記録や証言を基にドラマで再現し、心理学分析から解き明かしていた。人間の心理とはこんなに簡単な働きかけであっけなく揺らいでしまうものなのかと考えさせられ、多くの人の心に留め置きたい、普遍的な注意喚起を含んだ番組だった。

○　９月２８日(木)の魔改造の夜「ネコちゃん落下２５ｍ走」を見た。以前、札幌局のロビーで番組の関連イベントが行われており、興味を持って番組を視聴したが、非常に見応えがあり、最後に感動を覚えるような内容だった。

○　１０月４日(水)のにっぽん百低山「恵山・北海道」と１１日(水)の「イワオヌプリ・北海道」を見た。その山が地域の中でどのような役割を担っているか、人々の生活にどう関わってきたかなどが歴史的背景と合わせて説明されており、豊富な内容で見応えがあった。酒場詩人の吉田類さんと一緒に登山するゲストは、登山のレベルやコメントが放送回によってそれぞれ異なるのも印象的で、続けて視聴したいと思わせる番組だった。

○　１０月１５日(日)のＮＨＫスペシャル「ＯＳＯ１８　“怪物ヒグマ”最期の謎」を見た。ヒグマらしくないと恐れられたＯＳＯ１８の正体は、人間によって本来の生態と異なる生き方を強いられた１頭のヒグマだったということが分かり、非常に考えさせられる内容だった。ＯＳＯ１８のような不幸な存在を生み出さないようにするために、どうすればその流れを止めることができるのか、人間は自然界とどこまでも敵対するしかないのか、ヒグマと人間の未来はどうなっていくのかといった深くて強い示唆に富んでいた。この番組は総括的な作りになっていたが、さらに深い分析や専門家による検証も知りたいと思った。

○　１０月１５日(日)のＮＨＫスペシャル「ＯＳＯ１８　“怪物ヒグマ”最期の謎」をＮＨＫプラスで見た。ＯＳＯ１８の話をしていたはずが、いつの間にか人間社会のほうに問題がはね返されるという、個別の問題から社会全体を照らすような構成になっており、非常にすばらしかった。ＮＨＫプラスで「北海道」と検索してもこの番組は出てこず、ご当地プラス「＃北海道」のプレイリストにも入っていなかった。検索性はサイト全体の使い方に関わると思うが、ＮＨＫとして問題意識があるなら聞きたい。

（ＮＨＫ側）

ＯＳＯ１８駆除のニュースを受けて、すぐに道東で取材をしたが、番組としてどのようにまとめていけばよいのかをなかなか決めることができなかった。堆肥の中を掘るシーンも取材を進める過程で堆肥場に骨などが捨てられていることに偶然たどりつき、幸いにも発見することができた。結果として、番組の骨子となるストーリーが浮かび上がり、人間と自然の関りといった最終的なメッセージにつなげることができた。見通しがつかない中でも取材を継続していくことの重要性を感じた。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫプラスはさまざまな意見を受けて改修しているが、検索については現状でかゆいところに手が届いていない状況である。この番組についても、北海道で起きた事象を札幌局が取材、制作したので「北海道」というキーワードの検索で出てくるべきだが、そのような仕様になっておらず、本部のＮＨＫプラスを担当する部署とともに今後検討していきたい。

○　１０月１６日(月)のクイズ！丸をつけるだけ「第５回」（総合 後 7:57～8:41.30）を見た。最近のクイズ番組は演出として皮肉を混ぜることも多い中、先入観を持たず、純粋にクイズを楽しむことができる番組だった。

○　１０月１６日(月)の映像の世紀バタフライエフェクト選「砂漠の英雄と百年の悲劇」を見た。今のイスラエルとガザの紛争が、過去100年とどのようにつながっているのかを非常に分かりやすく伝えていた。ＮＨＫプラスには「イスラエル・パレスチナ情勢」関連の番組をまとめたプレイリストがあり、深掘りするのに便利だと感じた。

○　１０月１７日(火)の「松本人志と世界ＬＯＶＥジャーナル」(総合 後11:00～11:45)

を見た。松本人志さんが出演することを知り、番組を見たが、そのような視聴者も多かったのではないか。性の直接的な話が扱われており、さまざまな発見があった。日本は世界の中でも「性」に対して非常に遅れていることが分かると同時に、性教育の重要性を感じた。今後もＮＨＫが取り上げていくべきテーマや内容だと思う。

○　ＢＳプレミアムの「４Ｋ名作ドラマ」で放送した「菜の花の沖」や「エトロフ遥かなり」など、過去のドラマのアンコール放送を見た。これらの番組を初回放送したときは、現在のように録画を簡単にできる仕組みがなく、見たいと思いながらも叶わなかったことが多いと思うので、こうして過去の名作を掘り起こして放送することは非常に意義深いと思う。過去の番組のアンコール放送については、いつ、どのような番組を取り上げるかなど、基準やガイドラインがあるのか。出演者がスキャンダルを起こした番組は再放送できないなどの決まりはあるのか。また、旧ジャニーズ事務所に所属するタレントが出演している番組はどう判断するのかなど、ＮＨＫの考えを聞きたい。衛星波の整理・削減後も過去の名作を放送する枠はある程度維持してほしい。

（ＮＨＫ側）

ドラマのアンコール放送は、本部のドラマを担当する部署と編成とで相談しながら決めている。例えば、一部のドラマはＮＨＫオンデマンドにて有料で配信しているが、出演者の逮捕などの際には、映像資産の還元というＮＨＫオンデマンドが担う使命や利用者権利保護という観点、一部出演者の事情で作品性を損ねる対応を取るべきか否かといった考え方の下で総合的に判断している。

（ＮＨＫ側）

旧ジャニーズ事務所に所属するタレントの出演については、９月の会長会見で発表したとおり、被害者への補償や再発防止に向けた取り組みが着実に実施されていることを確認しながらの判断になっていく。アンコール放送については、放送資産の活用を進める動きがあり、衛星波の整理・削減後もニーズが高い番組や放送すべき意義のある番組は、引き続きさまざまな観点から検討していく。

ＮＨＫ札幌放送局
番組審議会事務局

２０２３年９月ＮＨＫ北海道地方放送番組審議会

９月のＮＨＫ北海道地方放送番組審議会は、２０日(水)、ＮＨＫ札幌放送局において、１０人の委員が出席して開かれた。

会議は、委員長の司会により開会。議事に先立ち、札幌局長と帯広局長からあいさつがあり、議事に入った。

議事はまず、北海道道「“脇役を主役に”　密着！新水族館の舞台裏」をはじめとして、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、１０月の番組編成の説明と放送番組モニター報告、視聴者意向報告が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長	金山　準	（北海道大学大学院ﾒﾃﾞｨｱ･ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ研究院　教授）
副委員長	笹森　琴絵	（酪農学園大学　農食環境学群特任准教授）
委　　員	伊藤　翔太	（株式会社トリプルワン　代表取締役）
	乾　　ルカ	（小説家）
	倉本ひと恵	（オホーツクベーグル　代表）
	清水　貴子	（地酒のまるしん商店　店長）
	鍋谷　雪子	（株式会社Ｎａｂｅｙａ　専務取締役）
	樋口　貴広	（株式会社環境テクノス　代表取締役）
	蛭川　隆介	（北海道新聞社　論説主幹）
	前田　茂雄	（前田農産食品株式会社　代表取締役社長）

（主な発言）

＜北海道道「“脇役を主役に”　密着！新水族館の舞台裏」
（総合　８月２５日(金)後 7:56～8:41)について＞

○　札幌市中心部の新しい商業施設にできた水族館が人間の自己満足のような場所に思え、悩ましい気持ちになった。直前に放送された円山動物園を取り上げた、北海道道選「あなたの知らない円山動物園」では、動物のための動物園としての役割を伝える内容に感銘を受けた。この水族館はどのような役割を担った場所になるのかもっと知りたかった。

（ＮＨＫ側）

水族館自体が人間のエゴだという考え方もある一方、自然に触れる機会が少ない現代では実際に生き物と対峙できる場は貴重だと思う。飼育員や館長が考えながら生き物の飼育環境をつくっていることを伝えたかった。

○　長期取材で培われた信頼があったからこそ、本当の舞台裏を知ることができたと感じた。館長と飼育員の目線の違いを取り上げており、それぞれの立場で飼育に取り組む真剣さが伝わってきた。実際に水族館の館内を巡っていた番組ＭＣ２人のコメントも身近に感じられた。

○　番組を視聴する前にこの水族館に行ったことがあったが、もう一度行きたいと思うことができない、残念な番組だった。直前に放送された円山動物園の話は動物のことを考えていることが伝わってきたが、今回は制作者側が取材内容を詰め込んだだけに感じられた。この水族館をテーマとして扱うために、便宜的に過去の類似番組を合わせて編成したという印象を持った。

（ＮＨＫ側）

今回、この番組と２年前に放送した北海道道選「あなたの知らない円山動物園」を続けて放送する編成を試みた。両番組の持つメッセージには近いものがあると思ったが、この水族館は新しい時代の見せ方を目指している側面もあり、視聴者が受ける印象はさまざまだったのではないかと思う。

○　自然の奥深さが感じられる番組だった。どうすれば魚たちが生き生きするのかと飼育員が葛藤する様子がよく分かった。円山動物園を取り上げた番組では、動物園が単なる人間の娯楽施設ではなく、動植物に寄り添うように大きく変化している様子が印象的で、自然界との距離が近い北海道だからこそ取り上げられたと思った。

○　番組タイトルにある「脇役」という表現は各人の主観によると思う。この水族館の飼育員全員がおたる水族館の職員だと明確に説明しておらず、視聴者に事実が正確に伝わらなかった可能性もあるのではないか。また、水族館オープン直前のシーンで歌詞のある曲を使っていたが、ドキュメントにおいては演出で視聴者の感情に訴えかけるのではなく、事実だけで構成してほしい。

（ＮＨＫ側）

この水族館の運営にはさまざまな会社が携わっているため、職員についての言及は検討したが、結果的に伝わりづらい表現だったかもしれない。歌詞のある曲は演出効果を見込んで使用した。

○　この水族館は来場者が生き物を見て楽しむことが一番になっており、生き物自身のことはあまり考えていないのではないかと感じた。業務提携しているおたる水族館にメリットがあるのかも疑問に思った。水槽の生き物たちはきれいで癒やされるので、都市型水族館が今後新しい客層に受け入れられるのではないかという期待感を持って、この水族館の今後を見守っていきたい。

（ＮＨＫ側）

道内や全国各地の水族館は、札幌都心部に新たな水族館ができることで、各地の水族館にも興味を持つ人が増えることを期待しており、飼育員の派遣や生き物の提供でこの水族館と連携している。

○　円山動物園とこの水族館に共通点があると考えて、この２番組を続けて放送したと思うが、円山動物園の番組が強く印象に残り、水族館の番組は掘り下げが足りないように感じられた。新水族館の持つ哲学や「脇役を主役に」という考え方が来館者にどの程度伝わっているのかなど、来館者の声を取り上げると、より分かりやすかったと思う。

（ＮＨＫ側）

「脇役を主役に」という考え方に疑問を持つことも理解できる。一方、チンアナゴはすみだ水族館で主役に据えられたことで広く知られ人気者になった。広く知られていない魚に光を当てることで人々の関心が向くというのも、新しい水族館の持つ可能性だと思う。

○　円山動物園とこの水族館をそれぞれ取り上げた番組をあわせて放送したからこそ、試行錯誤しながらさまざまな意味で変わっていかなければならないという状況下でのリーダーや飼育員の苦悩が見えた。「新水族館の舞台裏」というテーマと「脇役を主役に」という視点がよかった。脇役それぞれの機能や役割を感じながら見ると興味深かったが、視聴者が新しい水族館には主役級の生き物がいないと捉えてしまう恐れがあるのではないかと感じた。

（ＮＨＫ側）

館長と飼育員たちの摩擦や葛藤の部分は、あらゆる会社や組織でも当てはまると思う。経営者の発言が現場を分かっていないものだと感じることも一般的なことなので、組織を考える番組にしたいという思いがあった。

○　動物を取り巻く人々の価値観や信念、理想の行き違いを扱ったヒューマンドラマとして楽しむことができた。サブタイトルの「脇役」は、生き物のことよりもむしろ飼育員と彼らの努力を表すほうがふさわしいと感じた。円山動物園とこの水族館をそれぞれ取り上げた番組をあわせて見ることで、古くからある動物園、最新型の水族館、それぞれの理念社会に果たす役割の変遷を重層的に比較できた。番組を制作する際に、水族館の功罪や存在意義に関する論争を念頭に置いていたのかを聞きたい。

（ＮＨＫ側）

水族館の功罪は強く意識して番組制作に取り組んだ。今回担当したディレクターと記者は魚に詳しかったこともあり、その知見が番組制作に役立った。この水族館の館長はすみだ水族館立ち上げのスキルやそのノウハウを生かそうとしている。７０年以上の歴史がある円山動物園とオープンしたばかりのこの水族館では知識や経験、理念が全く異なるが、これから北海道で水族館をリードする立場になっていくのではないかと期待されている。

○　館長が語る生き物の新たな見せ方や飼育現場との対立や摩擦、動物は見せるものかどうかという軸に関心を持って番組を見た。飼育員の動物への思いや関わり方に感銘を受けた。館長と飼育員たちの摩擦のきっかけになったシマウミヘビの水槽の砂を減らすかどうかというシーンは軸になる場面だったが、問題の着地点が語られないままで、ごまかされたように感じた。

（ＮＨＫ側）

シマウミヘビの問題は、砂を減らして生き物にとっても心地よく、見る側もはっきりと見られるようにするということで落ち着き、放送した内容で着地点まで伝わると考えていた。

（ＮＨＫ側）

「北海道道」は通常は午後７時３０分から７時５６分まで放送しているが、夏休み明け最初の放送であったことや、この水族館を３か月間継続取材し、「ほっとニュース北海道」などでも取り上げてきた集大成とするというねらいで、７時３０分から８時４１分までの特別編成とした。２年前に放送した「円山動物園」と新作の「新水族館」を合わせて放送することで、それぞれの番組が伝えたいメッセージや特別編成のねらいが視聴者にどう届けられるか、制作担当と編成担当が深く議論した。この水族館が入る商業施設がある狸小路商店街をはじめとする地元関係者と連携した広報、ウェブ展開も行い、ふだんの「北海道道」よりも多くの人に視聴してもらうことができた。

＜放送番組一般について＞

○　９月１日(金)の北海道道「サンマ“記録的不漁”はなぜ？　調査船・北太平洋７０００キロ」を見た。調査船に同乗しての取材は、通常の取材とは異なり、過酷だったのではないかと想像した。番組内では各国の漁獲高をグラフで示すなど、正確な情報の提示がなされていた。研究者が「サンマの不漁についての取材を受けたときに、温暖化のひと言で片づけられそうになる」と述べていたが、報道番組では取材する側の結論ありきではなく、公平で客観的な事実を伝えてほしい。サンマだけでなく、北海道で漁獲量が大幅に減っているサケやイカについても取り上げてほしい。

（ＮＨＫ側）

番組を担当したディレクターによると、サンマの漁獲量は温暖化の影響だと片づけられてしまいがちだが、研究者の話では海流の変化など、分からないことが非常に多いとのことだった。分からないことが多い現象を複雑さも交えながら伝えていきたいと考えて、制作に取り組んだ。

○　９月１日(金)の北海道道「サンマ“記録的不漁”はなぜ？　調査船・北太平洋７０００キロ」を見た。問題が複雑であるということをそのまま伝えている構成が非常に分かりやすく、見応えがあった。今回の番組は調査船に同乗するということで科学的な側面を強く印象付けていたと思う。

○　９月２日(土)の「北海道を愛した画家たち～岩内で暮らし描かれた風景～」（総合

前 11:04～11:09 道北･ｵﾎｰﾂｸｴﾘｱ)を見た。岩風や波の音とともに映し出される岩内の四季折々の風景が、人間の一生の移ろいと重なり、余韻の残る番組だった。このシリーズの一挙放送も期待したい。

（ＮＨＫ側）

「北海道を愛した画家たち」は、北見局の技術職員が提案・制作し、現在まで３本放送している。一挙放送の要望はご意見として参考にさせていただく。

○　９月１２日(火)の「ほっとニュース道北・オホーツク」を見た。敬老の日に関連して、遠軽町のお年寄りを取り上げていたが、丁寧なカメラワークと取材力で本音を引き出しており、非常にすばらしい企画だった。

○　９月１５日(金)の３０ＤＡＹＳ「津別　予期せぬ出会い」(総合 後 7:30～7:55 北海道ﾌﾞﾛｯｸ)を見た。ゲストハウスに集まる年配の人たちに特に焦点を当てていたが、年配者にフォーカスした番組は高齢化や事業継承、地域活性化といった課題に注目が集まることが多いが、先行きの明るさといった今の等身大を見せる演出が好印象だった。また、９月１６日(土)の３０ＤＡＹＳ選「浦幌　若者が増える町」(総合 前 9:00～9:25 北海道ﾌﾞﾛｯｸ)を見た。経験豊富な世代が若い人たちを温かく見守りながら指導している様子に、一つの地域のつくり方が示されていた。「３０ＤＡＹＳ」はそれぞれ担当するディレクターの個性が感じられる番組である。「３０ＤＡＹＳ」の基になっている、「ほっとニュース北海道」で放送しているコーナー「ローカルフレンズ滞在記」は広く発信されている番組なので、今後も質を保ちながら成長することを期待している。

（ＮＨＫ側）

「３０ＤＡＹＳ」に共通するのは、３０日間の滞在の中で見えてくる物語を探すということ、地域のローカルフレンズと相談しながら、ともに番組をつくっていくという２点のみである。そのため、ディレクターの個性が強く表れる。津別編ではディレクターがふだんの暮らしの中に存在する希望や幸福感を追求したいという気持ちで取材していた。浦幌編は地域活性化の動きを意識して追いながら、暮らしの中にある豊かさを見つけて描いた。

○　９月１５日(金)の３０ＤＡＹＳ「津別　予期せぬ出会い」を見た。年を重ねても前

向きに元気に過ごす人や、まちへの愛情が伝わってくる、とても心地よい番組だった。

（ＮＨＫ側）

出演者から、この番組に取り上げられたことで自分の活動の意味に気付いたという感想をいただいた。対話を重ねることでふだんの取り組みの意味に気付いたのではないかと思う。

○　９月１８日(月)の「ミラドール　絶景を聴く　ヒューマンビートボクサーＳＨＯＷ－ＧＯ北海道の音を聴く」(総合 後 6:05～6:34 北海道ﾌﾞﾛｯｸ)を見た。火山ガスが湧き出る音にビートを合わせるなど、北海道の自然を紹介する切り口に衝撃を受けた。映像が非常にきれいだったのでアート感覚で見ることができ、ＮＨＫならではの内容だと感じた。芸術分野でこのような挑戦的な番組があれば、ミュージシャンの活躍の幅も広がるのではないか。

（ＮＨＫ側）

映像の質感や音の迫力は、８Ｋ機材での撮影が大きく影響した。ふだん耳にする何気ない音が、ヒューマンビートボックスとコラボレーションすることで異質な響きを持ち、私も驚きを持って番組を見た。

（ＮＨＫ側）

祝日の午後６時台は「ほっとニュース北海道」を休止しているが、その時間帯に可能な限り北海道地域の新しい魅力や最新情報を視聴者に届ける独自編成に取り組んでいる。この番組はまず全国向けに放送し、あらためて北海道地域に向けて放送した。今後も「北海道の今を伝える番組」を積極的に届けるよう努めていきたい。

○　８月６日(日)～２３日(水)の「第１０５回全国高校野球選手権大会」を見た。「熱中症に厳重警戒」や「日中の運動を控える」というスーパーが出ているにもかかわらず、炎天下で運動する高校生が画面に映っていることに矛盾を感じた。猛暑の中での試合を放送するということは、炎天下での運動を肯定することであり、選手が熱中症対策していればよいということではないと思う。高校野球の在り方をＮＨＫはどう考えているのか聞きたい。

（ＮＨＫ側）

夏の高校野球についての指摘は、視聴者からも寄せられている。大会運営上も工夫がされているものの、以前と比べて過酷な環境に高校球児が置かれていることについては問題意識を持っている。

○　８月１４日(月)のＮＨＫスペシャル「アナウンサーたちの戦争」(総合 後 10:00～11:30)を見た。テレビのない時代にラジオが戦争に与えた影響の大きさを改めて感じるとともに、ニュースは人間に伝えてほしいと思った。ＡＩアナウンサーが伝えるニュースは、内容よりも機械的な音声が気になってしまう。今後のＡＩアナウンサーの方向性を聞きたい。

（ＮＨＫ側）

気象情報の原稿をＡＩアナウンサーが読むなど、全国で生成ＡＩの試行と検討を続けている。生身のアナウンサーは不要ではないかという議論があるが、人間だからこそできることは何かを常に考えている。

○　９月３日(日)の「陸海空　絶景ぜんぶ見せます！世界自然遺産　知床」(ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ 後 1:00～2:29)を見た。知床の自然の豊かさがよく伝わると同時に、人間活動と自然保護のバランスをどう取るべきかを問いかける内容だった。一方で、出演者のコメントは人間に対して助長的だと感じるものだった。

○　９月１１日(月)のクローズアップ現代「“ジャニーズ性加害”とメディア　被害にどう向き合うのか」を見た。検証番組として制作、放送したこと自体は評価するが、視聴者が納得し、ＮＨＫの自浄作用に期待を持つかは疑問である。ジャニーズ事務所の問題でもあるが、報じないという形で看過し続けたメディアにより大きな問題があると考える。この番組におけるＮＨＫや民放の担当者の回答は、問題があったことを認め、自己反省しているとも取れるが、見方を変えれば言い訳をしているとも取れる内容だった。９月７日付でＮＨＫが発表したコメントを読んでも、今後の対応には期待できないと感じた。対応を誤るとテレビというメディアが視聴者から相手にされなくなるような大きな問題にもかかわらず、第三者を招くことなく、自分たちだけで改善できるという考えが表れているこの声明には、危機感が感じられず非常に残念だった。今回、報道されなかったことで得をしたのは加害者側であり、メディアは弱者ではなく権力者を守ったことで、自分たちも利益を得ていたことになり、メディアの在り方の根本を揺るがしていると言える。どういう状況だったのか、なぜそれを当たり前と思ってしまったのか、報道しないことでどのような利益がＮＨＫにもたらされた

のかをしかるべき立場の人が責任をもって視聴者に伝えるべきである。また、所属するタレントの出演を取りやめるべきという意見について、タレントに罪はないという意見に賛同する一方、反対意見が寄せられることにも意味がある。コメントを発表しただけの現状では、キャスティングの変更でしか、視聴者がＮＨＫの改革を確認できないということを忘れないでほしい。

（ＮＨＫ側）

９月７日に発表したコメントだけで終わったとは言えないという指摘や、今回のような問題を抱えていた組織の情報は信頼に足るものではなく、第三者を含め検証することが必要という意見はしっかりと受け止めたい。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫが社会の変化に対応できていなかったということが一番大きな問題だと考える。今後、私たちがどのようにして真摯に放送に向き合うのかが試されている。自分たちの至らなかったところをしっかりと自省し、その上で対策を取っていく。出演者の起用については、コメントにもあるように「番組の内容や演出に合わせて、ふさわしい人を選定」するだけでなく、「所属事務所の人権を尊重する姿勢なども考慮して」検討していく。

○　９月１７日(日)のＤｅａｒにっぽん「自由を創る学び舎（や）で～徳島・起業家を育てる高専～」を見た。教師と生徒が対等な立場で教育するという新しいスタイルの教育現場やその授業の様子から、希望のある教育の未来が見えてきたと思えた。

○　ＮＨＫのニュースなど、メディアがＡＬＰＳ処理水を表記する際にカタカナ表記と英語表記では印象が大きく異なる。表記一つで印象が変わり、カントリーリスクなど、さまざまな影響を及ぼしかねないと考える。同様に、放送における小さな文脈や伝え方の違いで大きな誤解を招く可能性もあると思う。

（ＮＨＫ側）

処理水と言うとトリチウムの話に集約されることが多いが、その手前の工程が詳しく説明されないこともある。カントリーリスクについても国内から正しい情報を発信していかなければならない。

（ＮＨＫ側）

全国のニュースを伝えるときには、多様な意見があるという前提のうえで、バランスを重視しつつ、軸となる科学的な根拠を説明することを意識している。北海道に向けたニュースでは、その前提を踏まえながら、さらに地元の生産者や事業者などの立場に寄せていくことを心がけており、今後もその姿勢を続けていく。

ＮＨＫ札幌放送局
番組審議会事務局

２０２３年７月ＮＨＫ北海道地方放送番組審議会

７月のＮＨＫ北海道地方放送番組審議会は、１９日(水)、ＮＨＫ札幌放送局において、９人の委員が出席して開かれた。

議事に先立ち、空席となっている委員長の互選を行い選出した。続いて、札幌局長と域内各局長からあいさつがあり、議事に入った。

議事はまず、２０２３年度後半期の国内放送番組の編成についてメディア総局・メディア編成センター編成専任部長から説明があり、２０２４年度の番組改定についての意見を伺った。

続いて、北海道道「あの日の詩（うた）はいまも～北海道南西沖地震３０年～」をはじめとして、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、8月の番組編成の説明と放送番組モニター報告、視聴者意向報告が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長	金山　準	（北海道大学大学院ﾒﾃﾞｨｱ･ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ研究院　教授）
副委員長	笹森　琴絵	（酪農学園大学　農食環境学群特任准教授）
委　　員	伊藤　翔太	（株式会社トリプルワン　代表取締役）
	乾　　ルカ	（小説家）
	倉本ひと恵	（オホーツクベーグル　代表）
	清水　貴子	（地酒のまるしん商店　店長）
	鍋谷　雪子	（株式会社Ｎａｂｅｙａ　専務取締役）
	樋口　貴広	（株式会社環境テクノス　代表取締役）
	蛭川　隆介	（北海道新聞社　論説主幹）

（主な発言）

＜「２０２３年度後半期の国内放送番組の編成」
および「２０２４年度の番組改定」について＞

○　衛星２波化については、最終的に波が１波削減されるという認識でよいのか。移行する中で、どこかのタイミングで完全に見られなくなってしまうのか。波が１波削減されるというのは非常に重大なことだと考える。また、停波以降に空く波は何かに活用する予定はあるのか気になった。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫとして、衛星波を一つ削減する方針である。来年３月３１日の停波に向けて、１２月に再編を行う。

＜北海道道「あの日の詩（うた）はいまも～北海道南西沖地震３０年～」
（総合　7月１４日(金)後 7:30～7:56)について＞

○　島の子どもたちが書き残した詩を中心に、子どもたちのその後の３０年を追う構成は心に響いた。将来への希望を込めたメッセージは、多くの人々に受け入れられる内容だった。あらためて、有事に備える重要性を訴えるよい機会だった。悲しい出来事を風化させずに防災に役立てるという番組ＭＣのコメントも訴えかけるものがあった。

（ＮＨＫ側）

「ほっとニュース函館」でも南西沖地震から３０年ということを多角的に伝えてきた。「北海道道」では、３０年を一つの大きな節目ととらえ、当時は子どもだったが、今は現役世代の方に語ってもらいたいと考え、当時被災した子どもたちを主人公にした。当時の映像を使う際には、つらい記憶としてよみがえらせないよう配慮しつつ、当時の大変な思いが伝わるようにした。詩については、当時の子どもたちの気持ちを最大限伝えるために、できる限り子どもたちの気持ちに寄り添って朗読する方法をとった。

○　当時の子どもたちの詩を手がかりに構成しているところが出色だった。災害がテーマの番組を制作する際には、間違った情報やうそ、作り手の過剰なストーリーの押しつけに注意が必要だと感じる。制作者側に都合のよい虚構が入るとドキュメンタリーは価値が落ちてしまう。また、ナレーターが子どもたちの詩を紹介するときに、芝居がかった読み方をするのがよいのかどうか、考えさせられた。

（ＮＨＫ側）

ナレーションへの意見は今後に生かしたい。古い映像を使ったことで、地震を実際に経験した方が若い人たちに当時の話をするきっかけになればと思う。被災当時、奥尻島に居合わせた

函館局の番組取材班が撮影した地震発生直後の映像は、視聴者の心理的な負担にも配慮し、放送する機会が少なくなっていたが、しばらくぶりにまとまった形で放送した。

○　当時の小学生がつらい経験を乗り越えて、ありのままの素直な気持ちを詩で表現していたことに感動した。主人公たちがそれぞれ前を向いて、家族や地域の人たちを大切に思いながら島を支えていることに勇気づけられた。仲間とスケートボードパークを作った方の話から、普通に暮らせることが何よりの幸せなのだということが伝わってきた。南西沖地震の記憶を風化させずに伝えていこうとした詩人の思いがよくくみ取られた内容だった。

○　子どもたちの詩を中心に番組を展開していく構成が見やすかった。子どもの頃と大人になってからの両方のインタビューが取り上げられていたことが印象的だった。防災に関する情報をさまざまな形で発信して、防災意識の向上を図ることは重要であり、非常に意義ある番組だった。

○　奥尻の夕焼けを背景に一編の詩の朗読から始まる冒頭に引き込まれた。子どもの豊かな感性と表現力に驚くとともに、乗り越えてきた悲しみの大きさに心が痛んだ。たくましさや負けん気を示す詩からは、子どもたちの生命力の強さが感じられた。子どもたちが大人になった様子や暮らしぶりの紹介もあり、復興の歩みがより深く理解できた。この詩集を編纂した方については奥尻島出身という以外の情報が紹介されておらず、もう少し経歴などを紹介してほしかった。

○　詩を通して津波を振り返るという演出が新鮮だった。子どもたちの鋭い感性から出た表現は、離島で起きた深夜の津波の恐ろしさを一層際立たせるものにしていた。今も奥尻島で生活する登場人物を通して３０年前と現在とを対比する試みは成功していたが、３０年の間、その時々の迷いや葛藤などにもふれていれば、より共感することができたと思う。震災当時の映像が少ない中、ＮＨＫが撮影した暗闇の中で火が燃え広がる映像は非常に貴重なものだ。日本海側の津波は到達までの時間がとても短いという差し迫った課題があるので、一体どのように対応すればよいのかを今後、関東大震災 100 年に向けて、防災報道に力を入れる中で示していってほしい。

（ＮＨＫ側）

東日本大震災の津波被害を思い浮かべる視聴者が多いと想定しながら、番組を制作した。圧倒的な映像の差がある中で、どれだけ当時の様子を伝えられるかを考え、詩に注目すること

にした。一人ひとり大変な経験をしたこの３０年をすべて描くというのは難しく、時間的な制約もあったため、被災して一度島を出て、また島に帰ってきたというようなコメントをすることで３０年間の軌跡を描くように努力した。

（ＮＨＫ側）

日本海側の津波は到達が非常に早く、現在の気象庁の警報が地震発生後３分を目指すようになったのも北海道南西沖地震の経験によるものである。日頃からさまざまな可能性が想定されることを伝えていかなければならない。

（ＮＨＫ側）

被災直後の様子と今の生活と対比することで番組に深みを持たせることができた。同時に、過去の映像はＮＨＫの貴重な資産だということもあらためて感じた。

○　出演した方々はつらい思い出のある場所で島と島民のために活動していて、頭が下がる思いだった。当時から今までの暮らしぶりや思いを現代の人々に本音で語って伝えたことに意義があった。奥尻島のどの地域でどのような被害があったのかを地図で示していれば、より理解が深まったのではないか。災害を風化させてはならないなどとよく言われるが、番組をきっかけに忘れてしまいたい体験を思い出してしまう方がいるのではないかという気がかりもあった。

（ＮＨＫ側）

南西沖地震の被害の全容や地理的な説明がなく、疑問に思った視聴者がいたかもしれないということは反省点である。

○　現在と過去を交差させながらじっくりと訴えかける構成になっていた。柔らかく温かいナレーションは、凄惨な過去を伝える内容の番組にもかかわらず、心にしみいってきた。子どもたちが飾らない言葉で淡々とつづった詩が、人間の心は底力や回復力を持っているということを教えてくれた。地震や津波の真実をさまざまな形で伝えたいという制作者の意図が十分に伝わってきた。地震や津波の被害を少しでもおさえるために、ＮＨＫには過去の経験を思い出すことができるような番組を制作し続けてほしい。

○　災害に遭った人がどのように現実を受け入れながらこの３０年を生きてきたのか、

今生きているのかを描こうとしたと受け止めた。登場した方々の描き方も単純で分かりやすい被災者像の提示ではなく、好感を持った。多様で複雑な被災者として生きる意味を丁寧に扱っていただけに、今後の防災に役立てようという趣旨の番組ＭＣのコメントはやや違和感があった。もう少し一人ひとりの経験の個別性を大事にするような締めくくり方であればよりよかった。

（ＮＨＫ側）

番組ＭＣのまとめコメントに関しては、防災や津波対策に正面から向き合う番組とは違った切り口で当時の災害をもう一度想起させ、そこから防災意識を高めてほしいという思いがあった。

＜放送番組一般について＞

○　６月２３日(金)の北海道道「没後１５年　氷室冴子をリレーする」（総合 後 7:30～7:57 北海道ﾌﾞﾛｯｸ)を見た。冒頭で氷室冴子さんを「ベストセラー作家」と紹介していたが、番組最後のコメントは、氷室さんの印象を売れなかったが一部のファンに深く刺さる作品を残した作家という印象にすり替えてしまった可能性があるのではないか。最後に俯瞰的な視点から一般論としてまとめるのではなく、氷室冴子という個人にフォーカスした番組だったので、最後まで氷室さんのことを語ってほしかった。

（ＮＨＫ側）

氷室さんはベストセラー作家として広く受け入れられ、作品が個々の読者の人生まで変えるほどだと認識している。そういった作品とその生き様が時代を越えて読者に刺さっていると伝えた。内容に応じて一般論に落とし込むことなく、別の形でまとめていくという方法も考えられたかと思う。

○　６月３０日(金)の北海道道「北海道の子育て　どうしましょう～少子化対策へのヒント～」を見た。育休を取得した男性が、不安や焦りを抱えながらも何とか育児を自分ごとにしていこうとする様子を伝えていたことは好印象だった。一方、育児を社会全体で担う取り組みが広がるとよいという結論で番組が終わってしまうのは、育児の社会化の流れに乗れない人々のことを置き去りにしているようで隔靴そうようである。ＮＨＫには、子育ての中で社会や地域の関係性に入ることが難しい人々の声も取り上げてほしいと思う。また、番組タイトルに「少子化対策」とあるが、内容は主

に子育て支援を扱っていた。少子化対策と子育て支援は大きく異なり、タイトルには再考の余地があると感じた。

（ＮＨＫ側）

子育ての中で社会の関係性に入れない方がいるのではないかという指摘は重く受け止めた。スタジオ部分でも社会の関係性に入れない人へのヒントになるような話を入れ込むといった工夫もできたかもしれない。タイトルについては、子育て支援と少子化対策を混同しないよう注意していきたい。

（ＮＨＫ側）

番組の収録を行った帯広局のキッズスペースは、若手職員がアイディアを出し合い、地域の方々へのアンケートも参考にしながら設置したものである。担当ディレクターは、キッズスペースづくりをきっかけにさまざまな方々と関係を築きながら番組を制作した。

○　７月７日(金)の北海道道「卵ショックはなぜ？　検証・鳥インフルエンザ」を見た。卵不足の問題を北海道から全国、世界へと舞台を広げてとらえながら、鳥インフルエンザ拡大のメカニズムや要因を科学的に説明する構成から、事態が一過性のものではなく深刻だということが伝わってきた。鳥インフルエンザの感染経路や要因についての専門家の解説が印象に残った。多岐にわたる課題を含んだ問題なので、それぞれの課題をより詳しく扱った番組も期待したいと思った。

（ＮＨＫ側）

身近な問題を掘り下げていくと広がりがあるという展開には、視聴者に新たな目線で考えてもらいたいというねらいがあった。

○　７月７日(金)の＃これ防災なんでＳＰ「発災後２４時間乗り切れるか？やってみた！」(総合 後 7:57～8:35 北海道ﾌﾞﾛｯｸ)を見た。身の回りにあるものが何でも防災に役立つという、ゲストの指摘に共感できた。公民館で物資を受け取る様子や被災時に使うグッズを体験する様子を見ることができてよかった。被災時に苦労することなどを調査したうえで、番組に盛り込むことができればより現実味があった。視聴者が防災を身近に感じ、普段から意識しながら生活することが重要だとわかった。

（ＮＨＫ側）

地震の発災後にブラックアウトが発生し、ライフラインが途絶した状況でどのように対応するのかをそれぞれの家族で体験してもらったという想定の説明を繰り返し丁寧に行うべきだった。避難をしている最中の様子が現実的な内容だったのかという指摘はしっかりと受け止め、今後の参考にしたい。

○　６月２３日(金)の「時論公論」を見た。地域局の解説委員が地元の課題を発信するのはよい取り組みだ。その地域で生活する人ならではの話を交えながら、各市町村史などのきめ細かい情報を伝えていて説得力があった。北海道でも同様に北海道の課題を地域目線で全国に発信し、道外の視聴者に考えてもらう取り組みを検討してほしい。

○　６月２４日(土)から放送している土曜ドラマ「やさしい猫」を視聴している。主演の優香さんは、偏見や先入観を持たずに誰に対しても自然体で、１人で娘を育ててきた母親という役柄に合った朗らかさと強さを感じる。夫のクマさん役を演じるオミラ・シャクティさんも礼儀正しくて優しい人柄が伝わってくる。第３回まで見て、名古屋市の入管施設で亡くなったスリランカ人女性のウィシュマさんの事件が頭をよぎり、彼女がいかに過酷で非人道的な状況に置かれていたかがドラマから想像させられた。

○　７月５日(水)のあさイチ「わたしの台所物語」を見た。台所という誰にとっても身近な場所を取り上げていてよかった。テレビで台所を取り上げる場合は、庶民的とはかけ離れたキッチンが取り上げられることが多い印象だったが、人にスポットを当てながらそれぞれに思い入れのある台所を紹介していた。また、ＮＨＫプラスでも視聴したが、まとめて番組を見るときに、１つの番組を視聴し終えたら次の番組に進むのではなく、１つ前の番組が始まってしまうのが残念だ。

（ＮＨＫ側）

スマートフォンのＮＨＫプラスのプレイリストは上から順に再生される。プレイリストそのものは下から古いものになっているため、１番組の再生が終わると１つ前の番組になってしまう仕様になっている。あらためて本部の担当者に改善を求めたい。

○　７月８日(土)の有吉のお金発見　突撃！カネオくん「出汁（だし）！うま味！昆布がとにかくスゴい！」を見た。北海道関連の内容だったので、道民にこそ見てほしい

内容だと思った。札幌局でも普段ＮＨＫを見ていない人に、北海道関連の全国放送番組を積極的に紹介してほしい。

（ＮＨＫ側）

道民にも意外な情報が紹介されていた。全国放送番組でぜひ道民にも見てほしいという番組は、これからも積極的に広報していきたい。

（ＮＨＫ側）

地域を舞台にした番組は、さまざまな世代に届けられるよう工夫を重ねていきたい。

○　７月１２日(水)のクローズアップ現代「命にかかわる“用水路転落”　身近に潜む水難事故を防ぐには」を見た。毎年全国で 100 名近い方が用水路への転落事故で亡くなっていると知り驚いた。用水路上にネットを張る対策を講じている地域住民の話し合いに関して、対策に賛成の住民と反対の住民双方を取り上げていた点がよかった。画面の左上のＱＲコードから追加情報を得ようとアクセスしたが、遷移先には番組の要約が掲載されているだけだった。用水路の説明や全国的なデータなども掲載してほしかった。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫが持つ各地域へのネットワークを生かしながら取材を積み重ね番組化したものだ。

（ＮＨＫ側）

地域局から問題提起をしてきたという経緯があり、番組関連の記事では全国の事故の発生状況や追加の取材データを掲載していた。

ＮＨＫ札幌放送局
番組審議会事務局

２０２３年６月ＮＨＫ北海道地方放送番組審議会

６月のＮＨＫ北海道地方放送番組審議会は、２１日(水)、ＮＨＫ札幌放送局において、１１人の委員が出席して開かれた。

会議は、委員長の司会により開会。議事に先立ち、札幌局長と釧路局長からあいさつがあり、議事に入った。

議事はまず、北海道道「ヒグマ危機　背景に何が」をはじめとして、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、7月の番組編成の説明と放送番組モニター報告、視聴者意向報告が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長	今村　江穂	（認定ＮＰＯ法人子どもと文化のひろば ぷれいおん・とかち　理事長）
副委員長	金山　準	（北海道大学大学院ﾒﾃﾞｨｱ･ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ研究院　教授）
委　　員	伊藤　翔太	（株式会社トリプルワン　代表取締役）
	乾　　ルカ	（小説家）
	倉本ひと恵	（オホーツクベーグル　代表）
	笹森　琴絵	（酪農学園大学　農食環境学群特任准教授）
	清水　貴子	（地酒のまるしん商店　店長）
	鍋谷　雪子	（株式会社Ｎａｂｅｙａ　専務取締役）
	西田　一博	（有限会社厚岸清掃社　代表取締役）
	蛭川　隆介	（北海道新聞社　論説主幹）
	船山　大介	（特定非営利活動法人　Ｎｏ　Ｌｉｍｉｔｓ　理事長）

（主な発言）

＜北海道道「ヒグマ危機　背景に何が」
(総合　６月９日(金)後 7:30～7:56 北海道ﾌﾞﾛｯｸ)について＞

○　衝撃的な冒頭から科学的な背景説明までの流れに引き付けられた。ハンターに密着したパートは番組のテーマにそぐわなかったからか、少々冗長だった。ヒグマの捕獲には相当の技術と経験が必要だと理解できた。一方、駆除が必然ということに疑問を持つことも重要である。ＮＨＫには、駆除ありきではなく、互いのテリトリーを守る

ことで共生していく重要性を伝えるよう努めてほしい。「ヒグマにはヒグマの領域があって、人の領域だけではないのだ」という番組ＭＣのコメントには救われる思いがした。

（ＮＨＫ側）

今回の番組ディレクターは、築いてきた人脈を生かし、５月中旬の朱鞠内湖の事故の後に、かつてヒグマに襲われた方から証言を得ることができた。春期管理捕獲への同行取材は、「ＯＳＯ１８」制作班が、ＯＳＯ１８を追う過程で実現した。

○　昨今ヒグマが多く出没している理由をよく理解できた。身近に迫るヒグマへの注意が必要だというメッセージが伝わってきた。課題の提示だけにとどまらず、人とヒグマの共生のための方策を紹介していれば、より一層次につながる番組になっていたのではないか。

（ＮＨＫ側）

ヒグマとの共生という重要なテーマを常に念頭に置きながら取材を続けていきたい。

○　朱鞠内湖の事故を起こしたヒグマの個体は、好奇心から人を襲ったという分析には説得力があった。人間を能動的に襲うヒグマが増えることは深刻な問題だと思う。本当にヒグマは人間を恐れなくなっているのか注目していかなければならない。ハンターの生き様に焦点を当てて伝えることで、若手ハンターの育成につながるのではないか。積極的に駆除すべきか、共存の方策はあるのかといったことをテーマに深く掘り下げていくことに多くの時間を割いて伝えてほしい。

○　近年ヒグマの出没が相次いでいる理由、人を恐れないヒグマ個体が出てきた理由を把握できた。目撃件数や農業被害額、駆除件数などの情報を分かりやすく提示していた。春期管理捕獲の密着取材は臨場感があった。市民がヒグマに襲われる映像は衝撃的な内容だが、ことわりを入れるなどの注意喚起をせずに放送していたことには評価が分かれると思った。駆除もやむなしの論調を生みたいのか、単に現状を知らせたいのか、番組の意図があるのか否かが判然としなかった。駆除について考えるうえで参考になる中立かつ正確な情報を今後も道民に届けてほしい。ヒグマの出没が相次ぐ現状にフレキシブルに対応して生放送にしたとすれば、そのフットワークの軽さを評価したい。

（ＮＨＫ側）

この放送は、番組に最新情報を入れるために生放送とした。

○　注意喚起なく映像を紹介したことについて意見があったが、同様の事例として東日本大震災後に津波の映像が放送されることによる子どもへの影響をＢＰＯの青少年委員会が懸念し、各テレビ局に要請する形で問題提起があった。それが一つの経験になり、刺激の強い映像や画像を紹介するときは、その都度影響を考えたうえで放送しており、今後もその取り組みを続けていきたい。

○　ちょうどヒグマの問題がさかんに報じられているタイミングで番組を放送したスピード感は評価できる。ハンターに注目するのであれば、その人の人となりなどの背景も知りたかった。ヒグマが増えている現状をもう少し詳しく検証して伝えていれば納得感が増したと思うが今一歩だった。

○　ヒグマに襲われた話はニュースなどでよく耳にするが、実際の映像や写真で見る機会は少ないので、貴重な証言を含んだこの番組の影響力は大きかったのではないか。なぜこの３０年間駆除の取り組みが進まなかったのか、行政側の話も聞いてみたかった。ヒグマ駆除に当たる人々の存在は地域にとって欠かせないので、彼らが置かれている現状を番組で視聴者に知らせてほしかった。ＮＨＫにはヒグマの追跡調査はもちろん、人とヒグマの共生についての啓発も期待したい。

○　ヒグマの怖さがよく伝わってきたが、すぐに駆除すべきという気持ちにもならなかった。正しく恐れるというレベルではどうにもならないような危機的な状況だと感じた。ヒグマが人に近付く３つのパターンをヒグマ研究の第一人者である大学教授がわかりやすく紹介しており、学びを得ることができた。数十年前に春グマ駆除制度を廃止し、人間が襲われるようになったことで、今度は駆除しようとする振れ幅の大きな行政の対応を指摘してほしかった。この番組からは駆除か共存かという選択を迫られたようには思えず、むしろ問題提起のように捉えられ、それに答えを出すのは道民なのだと思った。

（ＮＨＫ側）

行政は春グマ駆除制度を 1990 年に廃止し、３４年ぶりに春期管理捕獲を始めた。ハンターや農業関係者、酪農関係者は早く捕獲を再開するよう求めてきたが、現状のような事態になってようやく捕獲に踏み切ったのが実情のようだ。番組では農業関係者、酪農関係者、行政のこの３０年間については詳しく触

れなかったが、今後もこのテーマで番組を続けていくうえで大切にしたい視点だと考えている。

○　冒頭に出演した男性の傷跡の痛々しさと証言が衝撃的で、テレビの訴求力が発揮されていた。５月の朱鞠内湖での事故の解説は、ともするとヒグマは肉食獣だという印象を視聴者が受けやすい構成だったので、ほとんどのヒグマは草食で今回の個体がそれとは異なって、人を襲って一部を食べたという説明がほしかった。人慣れしたヒグマの問題行動だけでなく、渡し船で行く場所なので逃げ道がなかったことも今回被害を出してしまった要因ではないかという検証も必要だったと思う。

（ＮＨＫ側）

朱鞠内湖周辺の地域では、この何十年以上、人身事故は起きていなかったので、該当のヒグマは初めて人を襲ったと言えると考えている。ヒグマはもともと草食だが、５月２６日放送の北海道道「ＯＳＯ１８を追う男たち」でも紹介したように、急増しているエゾシカが冬場に餓死し、それを食べたヒグマが肉の味を覚え始めているようだ。その状況はハンターたちも危惧している。

○　全道のヒグマ目撃件数の右肩上がりのグラフに驚いた。ヒグマの身体能力の高さを示す映像からは、ヒグマに標的にされたら逃れられないという証言に説得力を持たせていた。春グマ駆除を復活させようにも、捕獲のエキスパートが高齢で若い世代に継承できていないことが問題になっているとあらためて理解できた。道庁で開かれたヒグマ捕獲のあり方を検討する部会の様子でも、若い世代の出席者が少なく見えたので、若い方との危機感の共有が積極的な解決策を生み出す道ではないかと感じた。

（ＮＨＫ側）

猟銃免許を所持している人は 1990 年と比較すると大幅に減少していたが、ここ最近は増えてきているようだ。若い人々へヒグマに関する知識を継承するために、ヒグマに詳しい人々と若い世代をどうつないでいくかという課題の解決が急務になってきているので、引き続き取材を進めていきたい。

○　有益な情報を伝えていた番組だった。後半のハンターによるヒグマ駆除に密着したパートは緊張感があり、映像自体として見応えがあった。ヒグマによる被害という扱う問題の性質上、致し方ない面はあると思うが、内容が過剰に刺激的な部分があった

のではないか。特に朱鞠内湖の事故現場の描写はあまりにも生々しいものだったので、そこまでの詳しい描写が必要だったのか疑問に感じた。このような情報に接するだけでダメージを受ける人は一定数いると思われるので、そういった表現への配慮と、伝えるべきことを伝える必要性とのバランスを十分に考慮してほしい。

（ＮＨＫ側）

表現の仕方については制作担当者の間でも議論した。ぼかして伝えることで実態が伝わらなくなってしまわないよう、また、実際に起こった事実をできる限り詳しく伝えるよう考えた結果、このようなコメントと映像構成とした。今後の事件や事故報道でもその都度、議論を尽くしていきたい。

○　道民にとって、関心の高いテーマだった。行政が昨年から具体的な解決策を検討し始めたとのことだが、この３０年の間にもう少し計画的な対応ができなかったのか疑問に思った。人に追われた経験のないヒグマが人のいる環境にも慣れてしまったために、人を見ても慌てて逃げなくなったという説明は非常に納得できる内容だった。一方で、「背景に何が」というタイトルの割に行政の対応の根拠を掘り下げておらず、物足りなさを感じた。全体として視聴者の思考がヒグマの駆除ありきに傾くような構成となっており、どう共生するかという視点が欠けていた印象だった。

＜放送番組一般について＞

○　５月１９日(金)の北海道道「バターが足りなくなる！？終わらない酪農危機」（総合 後 7:57～8:40 北海道ﾌﾞﾛｯｸ)を見た。冒頭で、酪農経営の実態について、全国の酪農家を対象に行ったアンケート調査結果を紹介していたが、調査対象が 157 人にもかかわらず、あたかも酪農業界全体の話のように紹介していたことに違和感を覚えた。ゲストの専門家が、酪農の現状の問題点や国の対応、今取るべき対策などを説明していたが、内容が難しくボリュームも多かったため、もっと詳しい説明が必要だったのではないかと思われ、番組の時間も短く感じた。番組タイトルの「バターが足りなくなる」が、家庭用ではなく業務用のバターのことを指しているのだとすれば、酪農の問題と家庭消費の問題を同列に扱うことには疑問がある。自給率を上げるべきだとする行政が、乳製品を輸入して、国内の酪農は減産だというのはありえないという酪農家の話には共感することができ、今後も引き続き、酪農業界と行政の動きを取材していってほしい。

（ＮＨＫ側）

タイトルに「バター」を入れることで、生活感や視聴者にとって身近な話題ということをできる限り伝えようとした。また、「酪農危機」と銘打つことで、身近な例から少し広い視点まで一緒に考えるように視聴者を誘う効果をねらった。位相の違う問題がタイトルで並列になっているという指摘はもっともだと思う。データの提示や専門家による解説のボリュームが多すぎたという指摘については、より理解しやすい情報の提示を心がけなければならないとあらためて思った。酪農は、「北海道道」で継続取材すべき大きなテーマだと考えおり、今後は行政の動きについても取り上げていきたい。

○　５月１９日(金)の北海道道「バターが足りなくなる！？終わらない酪農危機」を見た。2014 年にバター不足が叫ばれた頃からの経緯が丁寧に説明されていて、酪農危機という大きな問題の全体像をあらためて理解できた。番組を見る限りでは、酪農家が国の政策に振り回されているのに、国や道のほか、関係団体の考えや方針がよく分からず、関係各所のコメントがもう少しあれば、どのような事情があるのか、何かしようとしているのか、本当に無策なのかがはっきりしたのではないか。番組ＭＣが「国の対応と現状の危機的な状況とのギャップにびっくりした」や「農政の対応に非常に憤りを感じた」という強い言葉でコメントしていたのも納得できた。社会的にも関心の高い話題なので、継続取材を期待したい。

（ＮＨＫ側）

行政の姿勢を広く伝えるだけでなく、行政の型どおりの回答の先にある、言葉を尽くした説明を引き出すような力強い取材をしなくてはならないと考える。酪農の話題は継続して取材する覚悟を持っているので、農政に携わる人たちの考えをしっかりと聞き出すような取材を続けていきたい。

○　５月２６日(金)の北海道道「ＯＳＯ１８を追う男たち」(総合 後 7:57～8:40 北海道ﾌﾞﾛｯｸ)を見た。経験を積んだハンターたちが綿密な計画を立てても思いどおりにいかず、いら立つ姿を淡々と映し出していて、ＯＳＯ１８を追うことが一筋縄ではないことがよく伝わってきた。番組ＭＣの「増えたら捕獲し、捕獲し過ぎたら保護するという考え方はけっきょく人間のエゴであり、鳥獣保護区で仕留めなくてはいけないというのは皮肉である」という言葉には、番組を視聴した後に視聴者が抱いた感想が表れていたと思う。ヒグマが多大な被害を酪農家たちに与え続けている現実や人を襲う

可能性を考慮すると、ヒグマを擁護することははばかられる部分もあるが、野生のシカは食べてもよいが、家畜の牛はいけないというのは人間側の理不尽な言い分とは言えないだろうか。朱鞠内湖の事故があった今だからこそ、心にずっしり重く残る番組だった。北海道道「ヒグマ危機　背景に何が」を先に放送して、ハンターの仕事や生き方に興味が湧いた視聴者がこの番組を次に見る順序立てがあれば、なおよかったのではないかと思った。

（ＮＨＫ側）

行政が長期的な展望を持たず場当たり的な対応をしていることへの問題意識はＮＨＫも強く持っていた。３年前の 2020 年５月に古平町でヒグマによるものと考えられる事件が起きたとき、北海道スペシャル「裏山にヒグマがいる」を制作して放送した。遺族の方が、行政がこの３０年間、ヒグマが北海道に何頭いて、どういう被害が起きているのかを全く把握していないと憤っていた様子がとても印象的で、継続して真剣にヒグマの問題に取り組まなければならないと強く思った。状況は悪化の一途をたどっているという認識を持っていて、根本的な解決は本当に難しいと思う。中立かつ最新の情報を伝え、そのことについての認識を深め、議論ができるような場をこれからも作っていきたい。

○　６月３日(土)の北海道道「ＯＳＯ１８を追う男たち」の再放送を見た。“標津ヒグマ戦争”と呼ばれた時代があり、それを機に春グマ駆除制度が開始された歴史的背景がよく理解できた。ヒグマが増え過ぎたエゾシカを食べることで肉食に傾き、夏に放牧された牛をエサとして認識するようになったのではないかという推測や、これまでの謎を解き明かすような証拠が数々挙がる様子には見応えがあった。野生動物の保護と生態系のバランスを保持することの難しさを感じた。

○　６月１６日(金)の北海道道「どうなる！？北海道の観光」を見た。北海道の食というブランドを観光地が世界中にどのようにして発信していくのか参考になる内容であり、この秋に北海道で開催されるアドベンチャートラベル・ワールドサミットも紹介していた。これまでより高価格で落ち着いたサービスを提供するというテーマも十分に取り上げていて、好印象だった。ただ、全体的に課題の提示にとどまっていたように見え、高価格設定にはその分だけ北海道の魅力が反映されていること、そこに至るまでには企業努力や地域が一体となった取り組みがあったことなども踏み込んで紹介してほしかった。

（ＮＨＫ側）

地域全体の取り組みを伝えることで、地域がビジネスとして成功していることが説得力を持って伝えられたと思う。アドベンチャートラベル・ワールドサミットについては、ＮＨＫ北海道では「Ｗｉｌｄ　Ｈｏｋｋａｉｄｏ！」で北海道の自然を舞台にしたアクティビティを継続的に伝えてきた実績があるので、蓄積された映像を生かした番組で伝えたいと考えている。

○　６月１６日(金)の北海道道「どうなる！？北海道の観光」を見た。ホテルの深刻な人手不足は、どの地域の宿泊施設でも当てはまると感じた。美瑛町については、ほかの町でも行われているような取り組みが紹介されており、美瑛町ならではの活動を紹介してほしかった。「アドベンチャートラベル」という言葉は初めて聞いたが、道東地域に熱い視線が向けられていると知った。番組ＭＣの「道民は自分たちのポテンシャルを知らないのではないか」という言葉が胸に響いた。生き物との共生やガイド育成といった課題への取材を深めながら、アドベンチャートラベルについて、世の中に広めてほしい。

（ＮＨＫ側）

アドベンチャートラベルのアクティビティが、単に楽しむだけでなく、その先の自然の成り立ちや野生動物の生態にまで思い至ることができるものとなれば、よりよいものになると思う。美瑛町の畑体験は、町特有のオーバーツーリズムの例として畑への立ち入り行為があるので、畑への理解を深めてもらうために農業体験に力を入れているとのことだ。

○　６月１７日(土)のＷｉｌｄ　Ｈｏｋｋａｉｄｏ！選「利尻島一周サイクリング」をＮＨＫプラスで見た。自転車の映像には、適度なスピード感と臨場感があって楽しむことができた。冒頭ではサイクリングロードを赤線で示す地図が出ていたが、各ポイントに到達したときには地図が表示されなかったので、表示があれば分かりやすかった。

○　６月４日(日)のＤｅａｒにっぽん「鉄道員の決心～静岡・大井川鉄道～」を見た。大井川鉄道の復旧を願う地元の人々の鉄道愛が感じられた。鉄道関係の番組では、「六角精児の呑み鉄本線・日本旅」や「中井精也の絶景！てつたび」、「関口知宏のヨーロッパ鉄道の旅」もよく視聴している。趣味の鉄道番組も楽しみだが、特に近年、鉄道が

岐路に立たされているという現状がある。小さなローカル線が守られている印象のヨーロッパの鉄道政策は、これからの参考になるのではないか。北海道では赤字で存続が危ぶまれた路線のほとんどが廃止と決まってしまい、特急が通る幹線も予断を許さない状況なので、鉄道の在り方に関心が高まっている。鉄道の置かれた現状や将来像を本格的に深掘りした番組を制作してほしい。

○　６月６日(火)の【ＮＨＫ地域局発】茨城スペシャル「またここで酒造りを～老舗酒蔵　火災からの１年～」を見た。国の登録有形文化財に指定されていた２棟の蔵と自宅が火事に遭ったのち、少しずつ支援の輪が広がっていった。時間はかかっても酒蔵を復活させたいと思うようになった夫婦の強さが心に強く残った。復活には長い年月が必要になると思うが、その歩みをＮＨＫには伝え続けてほしい。

○　６月９日(金)のＮＨＫ高校講座　家庭総合「子どもを育てるのは誰！？～子どもの育ちを支える存在～」を見た。２０２０年度に初回放送の番組であり、司会のりゅうちぇるは、ジェンダーや価値観の多様性の観点から高校生にも親近感の持てる存在なので好印象だった。3つのトピックから知識を深め、専門家のコメントを交えながら、高校生が将来自分はどういう選択をするのかを自分ごととして捉えられる内容だった。当事者意識を持って考える力を養う内容に感銘を受けた。高校生だけでなく、すでに結婚してこれから家庭生活を始めようとしている人に対してもよい内容だと思う。

（ＮＨＫ側）

社会で新しい生き方が模索されているにもかかわらず、学校教育や制度などが硬直化している中で、「高校講座」は「高校」と言いながらも万人に開かれた情報の場を目指している。インターネットを含め、さまざまな情報を広く提供できるように提言していきたい。

○　６月１３日(火)の１００カメ選「“余命”と向き合う人　人生の残り時間を意識する人たちの日常に密着」を見た。内容がとても濃く、複数人に同時に密着していて、さまざまな視点から余命宣告をされた人の感情の移り変わりや思いを見ることができた。

○　聴覚障害者に対する合理的配慮としては、手話と字幕がある。その一方で、音声によるコミュニケーションが難しい方の中には日本語自体も理解できない方や、全番組に字幕をつけても日本語が読めない、理解できないという方もいる。そのほか、中途

失聴で聞こえなくなってしまった方については、全部に手話通訳をつけても手話が分からないという場合もある。このようにさまざまな状況に置かれている方がいるため、字幕と手話が同時に出るのが最もよいと言える。最近では、音声の認識システムや生字幕の導入が急速に進んでいて、文字による情報のほうが提供しやすくなっているが、それが進めば進むほど日本語の理解が難しい方々は取り残されてしまう。ＮＨＫには、これまで蓄積してきたノウハウを最大限活用して、伝わる方を増やし、取り残される方を減らすことで、公共放送としての役割を果たしてほしい。また、字幕や手話に限らず、取り上げられる機会が少ない障害について積極的に取り上げることを今後も期待したい。

ＮＨＫ札幌放送局
番組審議会事務局

２０２３年５月ＮＨＫ北海道地方放送番組審議会

５月のＮＨＫ北海道地方放送番組審議会は、１７日(水)、ＮＨＫ札幌放送局において、１１人の委員が出席して開かれた。

会議は、委員長の司会により開会。議事に先立ち、札幌局長と旭川局長からあいさつがあり、議事に入った。

議事はまず、「２０２２年度北海道地方放送番組の種別ごとの放送時間」について、報告があった。続いて、「ほっとニュース北海道」をはじめとして、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、6月の番組編成の説明と放送番組モニター報告、視聴者意向報告が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長	今村　江穂	（認定ＮＰＯ法人子どもと文化のひろば ぷれいおん・とかち　理事長）
副委員長	金山　準	（北海道大学大学院ﾒﾃﾞｨｱ･ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ研究院　教授）
委　　員	伊藤　翔太	（株式会社トリプルワン　代表取締役）
	乾　　ルカ	（小説家）
	倉本ひと恵	（オホーツクベーグル　代表）
	笹森　琴絵	（酪農学園大学　農食環境学群特任准教授）
	清水　貴子	（地酒のまるしん商店　店長）
	鍋谷　雪子	（株式会社Ｎａｂｅｙａ　専務取締役）
	西田　一博	（有限会社厚岸清掃社　代表取締役）
	蛭川　隆介	（北海道新聞社　論説主幹）
	船山　大介	（特定非営利活動法人　Ｎｏ　Ｌｉｍｉｔｓ　理事長）

（主な発言）

＜「ほっとニュース北海道」(総合（月～金)後6:00～6:40、6:55～7:00)について＞

○　番組の始まりの「おかえりなさい」という挨拶に、新年度の番組リニューアル当初は違和感を持っていたが、家庭のほっとする雰囲気を出していきたいというコンセプトを知り、納得感が増した。番組キャスターの神門光太朗アナウンサーは帯広局で「ほっとニュースぐるっと道東！」などを担当しており、地域のニュースや情報を自

分なりのことばを交えながら伝えたり、地域に積極的に出かけて取材している印象があり、好感が持てる。番組キャスターの是永千恵アナウンサーも番組に対して真摯に臨む姿勢が見て取れる。番組内では全国ニュースを放送しているが、午後７時から「ＮＨＫニュース７」があるので、あえて全国ニュースを放送する必要があるのか疑問に思う。

（ＮＨＫ側）

「ほっとニュース北海道」の中で、視聴者になるべく違和感がないように全国のニュースを放送する方法を日々探っている。

（ＮＨＫ側）

全国のほとんどの地域では午後６時から６時１０分は全国ニュースを放送しており、北海道の視聴者に伝えるべき全国ニュースを「ほっとニュース北海道」の中で伝えることで、ＮＨＫから伝える情報に地域間での格差が生じないよう工夫をしている。

○　動物たちが出迎えるようなアニメーションから始まるオープニングが好印象である。電話出演した視聴者が語った「おかえりなさい」ということばで落ち着くことができたというエピソードが心に残った。「あなたのニュース」では、視聴者からの投稿写真を紹介する際に写真を囲むフレームがあるが、フレームがないほうが見やすい場合もある。「ほっとニュース道北・オホーツク」では、「北の屋上菜園」のコーナーを毎回楽しみに視聴している。夏に向けて、育てているスイカが成長して、無事に収穫できるかに注目している。

（ＮＨＫ側）

視聴者と電話でやり取りするという試みは、投稿いただいた写真について直接話を聞いてみようというところから実現した。今後もスタジオと視聴者をつなぐ演出に取り組んでいきたい。

（ＮＨＫ側）

「ほっとニュース道北・オホーツク」の「北の屋上菜園」コーナーは、アナウンサーと気象予報士が野菜を育てている様子を見ることができる企画であり、視聴者がより見たくなるような演出を探りながらコーナーを継続させている。

○　放送されているそれぞれのニュースの項目は、丁寧な取材に基づいているものが多いと感じる。ＮＨＫプラスで配信されている全国各地の同時間帯の番組を見たが、「おかえりなさい」という番組冒頭の挨拶は「ほっとニュース北海道」しかなく、新たな試みだと思うので、自信を持って続けてほしい。

（ＮＨＫ側）

時間をかけてじっくりと伝えるニュース、コンパクトに伝えるニュース、テンポアップして伝えるニュースという３通りに分けてニュースを伝えるようにしており、１時間の中でニュースの伝え方に緩急をつけることで視聴者を飽きさせず、引き付けることを意図している。

○　Ｌｉｔｔｌｅ　Ｇｌｅｅ　Ｍｏｎｓｔｅｒが歌うテーマ曲を思わず口ずさんでしまったり、オープニングのアニメーションも見慣れてきて、午後６時から番組がスタートするイメージが定着してきたのではないかと思う。両キャスターのやり取りには安心感がある。「あなたのニュース」のコーナーから始まる番組の構成は、視聴者とのつながりを大事にしているように感じる。「ローカルフレンズ滞在記」の津別町編は身近な地域なので楽しみに視聴しており、次回の５月１８日や２５日のＰＲも丁寧に行われているので、今後も期待している。「シラベルカ」のコーナーは、ＳＮＳによる発信も増えており、注目度が高まっているのではないかと感じる。電気料金の話題など、視聴者の興味を引く話題をしっかりと調べて、伝えている。「ほっとニュース道北・オホーツク」では、５月１１日に湧別町のチューリップの話題を伝えており、後藤理アナウンサーのリポートに好印象を持った。道北・オホーツク地方ではいろいろな花が見頃の時期なので、中継などで積極的に発信してほしい。

（ＮＨＫ側）

「ほっとニュース道北・オホーツク」では、「道の駅グルメ中継」でアナウンサーが地域のさまざまな食べ物を紹介している。季節ごとに見頃を迎える花は、午後６時４０分に「ほっとニュース北海道」から「ほっとニュース道北・オホーツク」へ番組が移り変わったところで紹介したり、ニュースでも取り上げている。

○　番組が新しくなったことで、ターゲットとしている層が明確になった印象を受け、テレビの前で午後６時頃に慌ただしく晩ごはんの支度をしたり、ニュースを見ながら団らんをする４世代の家族といった視聴者層が想像できる。番組キャスター２名のや

り取りやスタジオのセットからは、視聴者と番組の距離感が近くなった雰囲気が感じられ、親近感を持っている。昨年度までは若年層を意識した企画や演出が多かったと思うが、そういった取り組みや展開は継続しているのか知りたい。

（ＮＨＫ側）

視聴者層はある程度は想定するが、番組の放送時間に在宅している皆さんに届くニュースを目指している。今後、ＮＨＫとして若年層にどう訴求していくかは大きな課題であり、テレビだけでなく、デジタルツールを活用した取り組みにも注力していきたい。

○　キャスター２人の雰囲気や身近でほっとするという番組コンセプトと、「おかえりなさい」ということばが合っている。４月２２日(土)の０７５５ＤＤチャンネル「『おかえりなさい』から始めます」では「ほっとニュース北海道」の番組制作の舞台裏を知ることができた。４月１４日の放送では、このテーマ曲をサウンドプロデュースした蔦谷好位置さんのインタビューがあり、番組制作者の温かかさやほっとする雰囲気を際立たせようという意気込みが伝わってきた。ヒグマ関連の話題が連日報じられているが、動物と人間双方のためにも恐れ過ぎたり、駆除ありきという考え方に陥らないようなアドバイスを盛り込んでほしい。「ほっとニュース道央いぶりＤＡＹひだか」は、道央エリアのそれぞれの地域が持つ魅力をまんべんなく紹介していて見応えがある。番組の随所で語られるキャスターのコメントからは各人の個性や温かみが感じられて、非常によい。

（ＮＨＫ側）

番組コンセプトを決めた後にキャスターを人選した。午後６時という時間は帰宅して、翌日の準備などを始める時間帯だという意見も参考に、その時間に視聴者にかけることばを考え、「今日も一日お疲れさまでした」や「おかえりなさい」という表現とした。

（ＮＨＫ側）

今年度から「ローカルフレンズ滞在記」は内容をより充実させるため月３回の放送とした。地域の人々との共創が制作者にとってなによりの経験になっている。５月から鹿児島局でも「ローカルフレンズ滞在記」が始まるなど、全国にその手法が広まりつつある。「シラベルカ」のＳＮＳアカウントでは、登録

者から質問をお送りいただくだけでなく、調査結果を見た人からさらに掘り下げた要望を受けることはできないかなど、試行錯誤しながら、放送するコンテンツに興味を持ってもらうことを目指している。

○　「ほっとニュース北海道」の番組名以外、キャスターやオープニング、テーマソング、スタジオセット、放送時間から番組構成まで大幅にリニューアルし、４月当初はキャスターの不慣れな感じが画面からも伝わってきたが、２人のやり取りも自然になってきており、ニュースの読みについては視聴者がニュースのポイントを理解しやすいように工夫されており、非常に分かりやすい。定時定点に帰ってくる人を受け入れ、ふるさと的なイメージの番組をつくりたいというコンセプトに自信を持って続けていってほしい。４月２５日の「道南ドキュメント７．２時間」はとても印象的な企画だった。取材を受けていた人々の持つ背景や語ることばが非常に心に残り、放送後のスタジオでキャスター２人が語っていた反応も素直で好意的だった。５月１５日の蔦谷好位置さんが生出演し、スタジオでのインタビューではキャスター２人がそろって聞き手に回ることで蔦谷さんとの自然なやり取りを引き出しており、非常に聞きやすかった。新しいキャスター２人の受け答えがテンポよく、スムーズになっていけば、お互いの良さが引き出され、番組をリニューアルした成果が出るのではないかと感じている。「おかえりなさい」というキーワードについても、当初はもっと検討すべきではと感じていたが、このことばに救われたという視聴者からの投稿があったように、番組を好きになるきっかけとなった視聴者もいると思うので続けていってほしい。

（ＮＨＫ側）

「道南ドキュメント７．２時間」のコーナーは函館局が制作しているが、１本の番組を制作したいという提案をきっかけに、まずは「ほっとニュース函館」の企画として、制作者が何をおもしろいと考え、どのような視点で物事をとらえようとしているのかを表現してみようということで制作を始めた。ふだんは番組制作に関わっていない職員からも担当してみたいという声が上がっており、さまざまな地域を訪れ、人々の話を聞いて伝えていくという意欲を持って次回以降の制作に取り組んでいる。

○　視聴者との距離を縮めるために「おかえりなさい」という表現を使い、メインキャスターにアナウンサー２名を起用したと理解している。番組の認知度を向上させるためには、神門アナウンサーのキャラクターを生かしたＰＲが重要だと感じている。番組の途中で全国のニュースを放送しているが、例えばワイプでキャスター２人を映し

て、視聴者と一緒にニュースを見ているように演出するなどといった工夫が必要ではないか。テーマソングは番組の雰囲気によく合っている。曲が流れることで「ほっとニュース北海道」を思い浮かべるようになるようＰＲに力を入れるべきだと思う。

（ＮＨＫ側）

神門アナウンサーを起用するにあたり、是永アナウンサーはバラエティー番組に関わる機会も多く実績もあるので、スタジオを盛り上げていく相手役として適任だと考えて、この２人を起用した。全国ニュースを放送することで、番組への視聴者の興味や関心が薄れてしまわないようにするにはどうすればよいかは引き続き探っていきたい。

（ＮＨＫ側）

今年度から毎月１回、２時間の生放送のラジオ番組「北海道のなにか」を放送している。神門アナウンサーが地域に出向き、地域の人々と直接触れ合って、その土地でどのような生き方をしているのかを２時間の生放送の中で伝えていく。訪れる場所はラジオでリスナーから募集して、ロケの様子はラジオで放送するだけでなく、ＮＨＫ北海道のＳＮＳでも公開している。

○　５月１１日の放送で、司法通訳が不足している問題をリポートで取り上げていた。外国人技能実習生による事件について、司法通訳が不足していることで警察に被害を伝えることができないという問題だったが、映像として可視化されることで深刻さがより伝わってきた。５月１６日の卵不足と鳥インフルエンザワクチンの話題も非常にタイムリーなテーマであり、現状への理解が深まった視聴者も多かったのではないかと思う。その日の主要なニュースをスタジオでの記者解説を交えながら伝えているが、「卵不足」のような日々の目に見える動きのある話題だけでなく、「司法通訳不足」のように、なかなか表には出てこない課題や問題を、記者が持つ問題意識に根ざした視点から掘り下げて伝えていくことにこれからも期待したい。

（ＮＨＫ側）

日々の出来事とは別に、記者が問題意識を持って掘り起こして伝えることは報道機関としての重要な使命だと考えて取り組んでいる。

○　地域のイベントなどを取り上げた際に、神門アナウンサーは本当に関心があるのだ

ろうなと感じられる反応であり、非常に好感を持っている。番組コンセプトを変えるにあたり、何を問題と認識し、それをどう変えようとしたのかを知りたい。また、５月１２日の放送で、蔦谷好位置さんが母校のイベントの様子を放送した際に、一人称として「俺」と言っていたが、字幕では「僕」としていた。本人のことばをなぜ字幕で変えているのかが気になった。今回はささいなことかもしれないが、制作者にとって都合のよい方向に流れることがないように、人の発言については基本的に丁寧かつ正確に扱うという原則を確認すべきではないか。

（ＮＨＫ側）

コンセプトに至るまでの課題意識の中心は、テレビ離れにあった。また、午後６時台のニュース情報番組に求められる内容や伝え方は、全国のニュースや毎正時のニュースとは異なるという視聴者が持っている感覚も強く意識した。蔦谷さんの発言と字幕が異なっていたことについては、ニュースの字幕として「俺」という字幕を出すことには違和感があるために言い換えた。表示する字数や文法的なそごを補正するために意図して修正することはあるが、これも抑制的に行うというのが大原則だと考えている。

○　リニューアルして間もない番組のキャスターに「おかえりなさい」と言われることに違和感は残るが、いつも番組を見ている視聴者には継続性、納得感が得られるようになるのではないかと感じており、長く続けてほしい。視聴者からの写真と投稿の紹介からスタートして気象情報が続くという流れは、これまでのニュースから番組が始まるイメージを覆す斬新さが感じられる。５月９日の「シラベルカ」では北海道電力の値上げ申請について取り上げ、取材をした担当者がスタジオで解説していたが、申請の理由が説明不足で終わってしまい、視聴者に誤解を生まないかと心配になった。「シラベルカ」のＳＮＳアカウントなどのデジタルツールで情報の補完をしてほしい。５月１０日の放送では、遠くアフリカのゴミ問題から、道内の小さな町の鉄路の歴史を継承しようと奮闘する女性の話題まで、幅広い取材が行われており、見応えがある内容だった。キャスター２人の衣装は自前なのか、コンセプトに合わせて選んでいるのか知りたい。

（ＮＨＫ側）

キャスターの衣装は、番組のコンセプトや本人の希望を反映しながらスタイリストが選んでいる。

＜放送番組一般について＞

○　５月９日(火)の「ほっとニュース道央いぶりＤＡＹひだか」を見た。むかわ町で津波から避難するときに車を使うとどのような問題があるかというテーマは非常に興味深く、見応えがあった。社会問題のような堅めの話題について、記者が時間をかけて掘り下げたリポートをもっと見たい。気象情報では、気象予報士が視聴者のそれぞれのライフスタイルに合わせて呼びかける伝え方に好印象を持っている。地域ごとの気象情報を細かく伝える中で、札幌市は区ごとに伝えているが、石狩全体の中で札幌市も１つにまとめて伝えてもよいと感じる。人口比などの考慮もあると思うが、市街地などの中心部を優遇しているように見えることは避けるべきではないか。

（ＮＨＫ側）

社会的な課題に切り込んだテーマを扱おうとすると、北海道全域に伝えたほうがよいという判断になり、「ほっとニュース北海道」で放送することも多いが、地域に落とし込んだ内容としての取材を重ね、エリア放送でも積極的に届けていきたい。気象情報の伝え方については地域をまんべんなく、あるいは人口比を考慮するなど、試行錯誤を重ねているが、札幌を特別扱いしているという印象を与えかねないという指摘は今後の検討に役立てていきたい。

○　４月７日(金)の北海道道「地方選挙って、実はおもしろい！？」を見た。選挙を経て各地で議会が始まるときに、次の４年後に向けて議会の動きを日常的に追う必要がある。議会が常に動いているということを伝え、有権者の議会への関心を高めることは当事者意識の醸成や議会の活性化への動きにつながる。また、ＮＨＫが道議会の旧弊に対して問題意識を持ち、映像によって改善を道民に訴えかけていくような取り組みがあれば、道議会に道民の関心を向けられるのではないか。

（ＮＨＫ側）

日々の出来事とは別に、記者が問題意識を持って掘り起こして伝えることは報道機関としての重要な使命だと考えている。統一地方選挙後の地方議会の現状や道議会については、問題意識を持って取り組んでいかなければ道民に届かないと思うので、心して取り組んでいきたい。

○　４月２３日(日)の「統一地方選開票速報（北海道)」(総合 後8:11.25～8:15、9:00～9:45、10:39～10:52、10:53.45～11:00、11:08.45～11:30 北海道ﾌﾞﾛｯｸ)を見た。函館市長選挙は投票率が高く、出口調査も大差がついていたので、投票締め切りの午後８時に当選確実が出るのではないかと思っていたが、なかなか出なかった。当選確実を出す判断などの選挙報道の考え方を聞きたい。

（ＮＨＫ側）

当選確実を出すには一定の基準を設けて判断している。函館市長選挙の注目度の高さは認知していたが、基準に照らし合わせて、その判断のもとに当選確実を出した。

○　５月６日(土)の北海道道・選「探検！北大の“広すぎる研究所”」を見た。アニメーションや画像を交えた解説が分かりやすかった。広大な農場を牛と一緒に走り回る牧場長の北海道大学准教授の親しみやすい人柄が魅力的で、印象に残った。

（ＮＨＫ側）

再放送だったが、今回も反響が大きかった。北海道ではさまざまな研究機関で多様な研究が進んでいるので、幅広い取材によって、その成果を多くの視聴者に見て、知ってもらいたいと考えている。

○　「ほっとニュースぐるっと道東！」を見た。昨年度から始まり、１年間で番組の完成度が非常に高まった印象を受ける。地域の子どもたちによるタイトルコールもあり、より地域に根ざした番組になってきた。一方、これまではあった帯広局から釧路局への呼びかけややり取りが少なくなっていると感じている。「明日へのくらし」のコーナーは、地域の子育て支援に関する話題を扱うということで期待していきたい。

○　４月１４日(金)の長崎セレクト９０「“ユーミンの島”はいま」(総合 後7:30～8:42 長崎県域)をＮＨＫプラスで見た。長崎局の開局９０年を記念してアーカイブス放送する番組で、松任谷由実さんが 1974 年にラジオ番組の投稿をきっかけに五島列島の高校の校歌を贈った話をＮＨＫが何年もかけて取材していたものだったが、現在の島の様子など時代の流れを感じることができる内容だった。

○　５月１６日(火)の「情報ＷＡＶＥかごしま」をＮＨＫプラスで見た。「ほっとニュース北海道」で放送しているコーナー「ローカルフレンズ滞在記」を鹿児島局でも取り組み始めた「ローカルフレンズ鹿児島」を放送していた。ロゴやイラスト、テーマ曲

なども同じ演出の企画だが、地域が異なると全く違った印象になるということを感じることができた。ディレクターによる解説が長く、地域の人々との会話が少ないと感じた。地域の人々とのやり取りをもっと厚く取り上げることで地域色がはっきりしてくると、より充実した企画になるのではないか。

○　４月２３日(土)のＤｅａｒにっぽん「弟の最期と向き合って～“コロナ”遺族　沖縄への旅～」を見た。コロナで亡くなった方が、過去の災害や戦争に比べて取り上げられる機会が非常に少ない中で、実名でなおかつ詳細にまで言及して伝えていたことは、一種の災害とも言える新型コロナについての教訓から社会としてどう学び、次に感染症が発生した際にどう生かすかを考えるうえで意義深い番組だったと思う。

○　４月３０日(日)のさわやか自然百景「北海道　別海の森」を見た。エゾリスやオジロワシ、エゾモモンガやキツツキなど、季節によって移り変わる海風と湿地に生かされる生き物たちの姿を伸びやかに捉えていて、豊かな生態系が成立していることを伝えていた。人間に都合が悪いからといって、動物たちを駆除し過ぎることは、人間の知恵では計り知れない生態系や食物連鎖の巧妙さに影響を与えるものであり、共生するための方策を探すべきだと改めて感じた。

（ＮＨＫ側）

季節的に取材が難しい時期だったが、この番組を担当したディレクターは丁寧な取材を積み重ねて、小さな動物たちの細かい動きをしっかりと撮影しており、この番組で強調したかった生態系や循環といったメッセージがしっかり伝わったと思う。

○　４月３０日(日)のダーウィンが来た！「いちばん身近な生きもの！野菜大研究」を見た。植物という生き物の中で、野菜にスポットを当てるということが興味深かった。私たちは野菜の本領を目の当たりにしないうちに食しているということが分かった。また、５月１４日(日)の「４００年ぶりに復活！森の建築家ビーバー」を見た。ビーバーが木を切り倒して森は大丈夫なのかとか、河川に動物がダムをつくることで下流に影響はないのかといった日頃の疑問に過不足なく答えてくれていた。次回の「巨鳥を守れ！オジロワシレスキュー」も楽しみにしており、狩猟に関する諸問題にも触れてほしいと期待している。

○　５月３日(水)の「アナテレビ」(総合 後 7:30～8:52)を見た。ＮＨＫと民放各局の看板アナウンサーがアナウンサーの仕事について語り合うという見応えある番組で、アナウンサーの役割や位置付けを通して、テレビの未来について想像することができ

た。アナウンサーの個性や人柄、そのアナウンサー固有の表現が、視聴者の共感や感動を呼び起こすのではないかという議論が非常に興味深かった。

（ＮＨＫ側）

ただ原稿を読むだけのアナウンサーはＡＩに取って代わられてしまうという危機感を持ち、アナウンサーの価値を考え続けている。懸命に生きる人たちに光を当てる役割や、個性をどのように発揮するかといったことについてアナウンサー同士で議論を重ねている。

○　５月５日(金)の「君の声が聴きたいー“考える”をはじめるー」(総合 後 7:30～8:52)を見た。こどもの日に寄せて、継続的に子どもたちの今を見つめて掘り下げるテーマへの取り組みは非常に意義深いものだと感じた。学校の現状を語るコーナーでは、学校を変えるために精力的に発信している研究者が出演しており、一斉授業で同じことを教わって競争させられているという日本の学校制度の問題を正面から取り上げようとしていることに驚きながら、番組を視聴した。

○　５月６日(土)のようこそ認知症世界へ「ミニ０５服ノ袖トンネル」(総合 前 11:43～11:53)を見た。認知症の方々の暮らしの中にある困りごとや問題点を視聴者が当事者目線で体感できる独創的な構成だった。認知症の方を紹介する字幕の柔らかな表現は見ていて心地よく、制作者の思いやりが伝わってきた。専門家による認知機能についての詳細な解説によって、理解が深まった。

○　５月１１日(木)のサラメシ　シーズン１３「(５)カツカレー大好き教授▽駐ペルー日本大使登場！」を見た。カツカレーへの愛が強いことで有名な北見工業大学の教授が出演していて楽しい番組になっていた。

○　５月１１日(木)のＮＨＫ　ＭＵＳＩＣ　ＳＰＥＣＩＡＬ「ＹＯＡＳＯＢＩ～小説を音楽にする魔法～」(総合 後 10:00～10:44.45)を見た。ＹＯＡＳＯＢＩと小説家が対談し、ライブ演奏をするという内容は見応えがあり、このような番組がアーカイブされていくことは非常に価値があると思った。

○　５月１３日(土)のレギュラー番組への道「コレ押したらどうなる？」を見た。押してはいけなさそうなボタンを押すという秀逸な番組コンセプトに感心し、おもしろく見ることができた。

○　５月１４日(日)の「ＮＨＫのど自慢」を見た。４月からバンド演奏がカラオケになったのを実際に見て、物足りなさを感じた。地域の人々の純粋な歌唱をバンド演奏が後押しするような味わい深さがあった。カラオケに変更した理由を聞きたい。

（ＮＨＫ側）

若者にも人気の楽曲を地域ごとの演奏者にアレンジしてもらうことが難しくなってきている中で、ＮＨＫとしては若年層の方にも「ＮＨＫのど自慢」に積極的に出場してほしいので、その狭間で苦渋の決断をしたのが理由の一つである。

○　５月１５日(月)の「ニュースウオッチ９」を見た。ワクチン接種後に亡くなった方のご遺族ということを正確に伝えずに、新型コロナに感染して亡くなったと受け取られるような印象を与える伝え方をしたことについて、なぜあのように報じてしまったのか検証することが、次の間違いを起こさないためにも重要だと思う。

○　「ニュースウオッチ９」について、今後はＮＨＫの報道に対して絶大な信頼感を寄せている視聴者を裏切ることなく、公正中立な報道を体現していってほしい。

（ＮＨＫ側）

当事者から聞き取りをしながら、なぜこのようなことが起きたのか検証を進めている。その結果を報道現場が広く共有しながら、再発防止に努めていく。

ＮＨＫ札幌放送局
番組審議会事務局

２０２３年４月ＮＨＫ北海道地方放送番組審議会

４月のＮＨＫ北海道地方放送番組審議会は、１９日(水)、ＮＨＫ札幌放送局において、９人の委員が出席して開かれた。

会議は、委員長の司会により開会。議事に先立ち、札幌局長と函館局長からあいさつがあり、議事に入った。

議事はまず、北海道道「リトグリの新生活応援ＳＰ」をはじめとして、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、５月の番組編成の説明と放送番組モニター報告、視聴者意向報告が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長	今村　江穂	（認定ＮＰＯ法人子どもと文化のひろば ぷれいおん・とかち　理事長）
副委員長	金山　準	（北海道大学大学院ﾒﾃﾞｨｱ･ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ研究院　教授）
委　　員	伊藤　翔太	（株式会社トリプルワン　代表取締役）
	乾　　ルカ	（小説家）
	倉本ひと恵	（オホーツクベーグル　代表）
	笹森　琴絵	（酪農学園大学　農食環境学群特任准教授）
	清水　貴子	（地酒のまるしん商店　店長）
	鍋谷　雪子	（株式会社Ｎａｂｅｙａ　専務取締役）
	船山　大介	（特定非営利活動法人　Ｎｏ　Ｌｉｍｉｔｓ　理事長）

（主な発言）

＜北海道道「リトグリの新生活応援ＳＰ」
（総合　４月１４日(金)後 7:30～8:15 北海道ﾌﾞﾛｯｸ)について＞

○　Ｌｉｔｔｌｅ　Ｇｌｅｅ　Ｍｏｎｓｔｅｒの北海道出身メンバーの里帰りに密着するコーナーからは、帰る場所があるということは頑張る原動力になるのだということを感じ取ることができた。ほかにも北海道出身の若者が取り上げられていたが、いずれの人たちも夢に向かって頑張り、挫折を味わいながらも前を向いて挑戦し続けていた。公開収録に訪れた来場者に事前に意気込みを書いてもらい、それを集めて紹介した演出は出演者と会場の一体感の醸成に役立っていた。実際に頑張っている人たち

に「頑張りなさい」と言うことはプレッシャーになると昨今言われるようになっており、うかつに相手にかけられないことばになりつつあると感じている。しかし、この番組では、リトグリのメンバーや子どもたちが自分自身を鼓舞する意味で言っており、自分を元気づけるためには「頑張る」ということばは大切で重要だということも改めて思った。

（ＮＨＫ側）

リトグリというグループ自体がメンバーの卒業による存続の危機にあり、そのまま歌い続けることができるのかという葛藤や、自分たちが歌う歌詞に勇気づけられる人たちがいるということを自分たちが危機に立ったことでより自覚したという、彼女たちの姿が番組の立脚点になった。さらに、実際に選手生命が絶たれ、新しい分野で頑張るという、自分自身が大変な思いをしている方々の話からは「頑張れ」ということばが上滑りせず強く響くものだったのではないかと思う。「頑張れ」ということばの意味や使い方については、今後の番組制作においても気をつけていきたい。

○　新生活や人生の分岐点において苦労したことがあるという、本当に頑張っている北海道の人たちを詳しく取り上げていたと感じた。地方のテレビ局が制作するローカル番組では、音楽ライブのような番組が減りつつある中、一つのアーティストにスポットライトを当てた、非常に好感を持てる番組だった。

○　「新生活」や「応援」という番組タイトルから、新生活に臨む人たちを応援する番組なのだろうかと想像しながら視聴したが、実際は新しい人生や新しい生き方を選んだ人を応援する番組だった。公開収録形式だったこともあり、歌のパフォーマンスやメンバーとＭＣのトークの場面が多かったが、ＶＴＲに登場していた人たちの活動をもっと掘り下げて紹介してほしかったし、リトグリファンはメンバー一人一人についてもっと焦点を当ててほしかったのではないかと思った。また、ＶＴＲで流れているＢＧＭもリトグリの曲を使ってほしかったし、歌で応援というコンセプトにも合っていなかったのではないか。視聴後の満足感も乏しく、期待外れに感じた。

○　ＶＴＲで紹介されていた２人とも、ふるさとの北海道の人たちに温かく応援してもらっており、その中で「外に出ないうちに迷っているぐらいなら、外に出てもまれろ」というコメントは、「新生活応援」という番組のコンセプトにふさわしい印象に残るものだった。もう１人の「成功してもしなくても実家や地元はなくならないので、い

つでも帰って来ていいんだ」というコメントも視聴者を勇気づけるような力強いものだった。内容が印象深かった半面、ターゲット層があいまいだと思った。春からの新生活を頑張ろうとする若者を応援するという意図は感じ取れたが、それ以外の視聴者層にはどのように響いたのかが気になった。

○　現在は福祉施設を経営する人の人生を追ったパートを視聴しながら、「新生活応援」という番組コンセプトとのつながりを探った。彼のエピソードは非常に共感が持てて、そのことばの一つ一つには深いメッセージが込められており、新生活を始める人々へのよい応援になるコメントが多かった。しかし、リトグリの中心的なファン層と考えられる２０代、３０代の視聴者にとっては、もう少し明るい内容でもよかったのではないか。リトグリのソフトで明るい雰囲気とのギャップゆえに、せっかくの印象深いメッセージをうまく受け取ることができなかった視聴者も多かったのではないかと感じた。

（ＮＨＫ側）

ふるさとがあるからこそ頑張れるという大きなメッセージに重点を置きながら硬軟織り交ぜた番組構成とした。本格的なドキュメンタリーとしてだけではなく、エンターテインメントの要素を多く含みながらも、視聴者に深く考えてもらうような要素が盛り込まれている番組になるよう意図して制作した。

○　取り上げた人物に妥当性はあったが、なぜ「北海道道」という番組として放送したのかという疑問が最後まで残った。それぞれが単独で特集されてもよいのではないかと思われ、このような形の番組で消費されたのは惜しかった。「新生活応援」と言いながら、ふるさとや実家があることが前提となっていたことに違和感を覚えた。「新生活」と「おかえりなさい」というテーマに傾倒したために視野が狭くなっていたのではないか。今後、「北海道道」がどのようなテーマを取り扱っていくのか注視していきたい。

（ＮＨＫ側）

「北海道道」は、北海道の新しい情報や、知られざる姿を深く掘り下げて描くということなどを番組の編集方針として掲げている。「北海道道」として、これからどのようなテーマを持ち、どのように演出していくのか議論を続けていきたい。

○　番組タイトルは４月という放送のタイミングにふさわしかった。登場人物それぞれ

のふるさとの温かい雰囲気がよく描かれていた。特にＶＴＲの中で映し出された、２人を支える人たちの笑顔や、新生活を迎える人々へのメッセージも印象に残った。ただ、なぜ恵庭市で収録されたのかということと、なぜリトグリを取り上げたのかということについて気になった。特に２つ目については強い違和感を抱いた。確かに札幌出身のメンバーの里帰りというエピソードはあったが、そのあとのＶＴＲで紹介されていた人たちよりも取り上げる理由が弱く、印象が薄く感じられた。

（ＮＨＫ側）

恵庭市での収録となったのは、会場の問題が大きく影響していた。企画から収録までの短期間にある程度の規模を担保できる場所は限られており、恵庭市民会館で収録を実施することとした。

○　リトグリにスポットライトを当てる部分と、北海道出身で新生活を頑張る人たちの２つに大きく分けられたが、番組の中心がどこにあるのかがあいまいだった。リトグリだけでは「北海道道」にならないため、北海道の話題を少し継ぎ足したような印象に映った。また、公開収録の会場で空席が見られたのが気になったが、これについてはどのように考えればよいのか知りたい。

（ＮＨＫ側）

会場の空席については、できる限り多くの方々に来てもらいたいという気持ちはあるが、コロナ禍で制限せざるをえない部分がある。今後、コロナ禍以前の体制に戻すことも検討している。

○　リトグリのメンバーの１人が札幌出身だということ、メンバーが抜けてグループの存続が危ぶまれたこと、新メンバーの加入を経て再始動するまでに激動の期間があったということが理解できた。札幌出身のメンバーの里帰りの様子はややインパクトが薄かったように感じられた。一方、北海道出身の２人が再出発する様子は、北海道の人の温かさや包容力、チャレンジを応援する優しさのようなものが共通して読み取れた。特に２人目の方は、う余曲折を経ながらも小さな町に溶けこんで活躍しており大変興味深かった。掛値なしに自分を応援してくれる人の存在の大切さに気付かされた。彼自身の言葉にも苦しみを乗り越えてきたからこその深さや重みがあった。最終的には「ほっとニュース北海道」のテーマソングである「おかえりなさい」に託された「大きくて、温かくて、優しい」という北海道の魅力を再確認して、北海道の人たちを応援するというのが番組コンセプトだと理解した。公開収録の来場者のコメントを集め

た演出も視聴者との一体感があったが、豪華さの割に客席の空席が目立っていたのがもったいないと思った。

（ＮＨＫ側）

この番組はまずはイベントの構想があり、それをさらに展開するために「ほっとニュース北海道」や「北海道道」との連動を図った。新年度からリニューアルした「ほっとニュース北海道」は、ふるさとを大事にしつつ、「おかえりなさい」というコンセプトで温かみを出していくという構想があり、その新しいイメージを視聴者に印象付けたいという思いもあった。

＜放送番組一般について＞

○　３月２１日(火)の道南スペシャル「函館　大門にて」(総合 後 6:05～6:30 道南ｴﾘｱ)を見た。これまでに函館局が放送してきた道南地域の歴史にまつわる番組を念頭に置きながら視聴したが、この番組で取り上げていた大門地区の店それぞれが歴史と時代の流れを彷彿とさせた。また、少し暗さを感じさせる映像と登場人物たちの明るくなりきれない複雑な心情がリンクしていて印象に残った。番組の最後は地域が明るい方向に向かっていくと示すような結末になるのではないかと予想していたが、悲哀のあるまちの様子そのままで、制作者がテーマとしていた「大門の“におい”」を感じさせる終わりとなっていた。

（ＮＨＫ側）

カフェをやめるという女性を起点として、ディレクターが悩みながらたどり着いたのが、大門というエリアに範囲を広げての取材だった。事前に取材を依頼するというよりも、まずは店に足を運んで取材する手法によって、出会った人にさまざまな思いを吐露してもらうことができた。私も結末は明るい話になるのかと思っていたが、制作したディレクターは、大門地区の寂しい様子こそが現状をしっかりと表しており、それを何とか自分で映像に収めて伝えようとして、寂しいまま終わるというエンディングとしたとのことだった。

○　３月２４日(金)の北海道道「それでも私はあきらめない　網走・病に向きあう医師」を見た。自分自身のくじけそうな気持ちを力に変え、患者にも勇気と希望を与え続け

る様子に胸が熱くなった。本人が何度もがんを再発しながらもあきらめない姿は、視聴者に勇気や元気を与えてくれたのではないかと思った。

○　３月３０日(木)の「ほっとニュース北海道」を見た。「＃これ防災なんで」はとても楽しみなコーナーであり、防災意識を日常生活の中に定期的にインストールする感覚で視聴できるコーナーというコンセプトは非常によい。社会のさまざまな立場や視点が防災という一点に集まる感覚が斬新で、防災においても日常生活をいろいろな見方で見ようという発想の転換があるものなのだと気付かされた。

（ＮＨＫ側）

「＃これ防災なんで」は、ふだんの報道とは異なる発想で、防災を視聴者の日常に落とし込んでいくことを目指しているコーナーである。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫ北海道全体で「防災」を大きなテーマに据えており、エリア放送を含めて、防災意識を高める呼びかけを続けていきたいと考えている。「＃これ防災なんで」は、視聴者からの提案などを生かした双方向も意識して、今後も定期的に伝えていくことで、防災意識の定着を目指していきたい。

○　３月３１日(金)の道北オホーツクスペシャル「懐かしの鉄路　廃線紀行スペシャル」(総合 後 7:57～8:24 道北･ｵﾎｰﾂｸｴﾘｱ)を見た。国鉄時代に１２もあった路線が廃線になっている現実を知り、何とかならないものかと胸が痛くなった。過去の映像からは、懐かしさとともに当時のにぎわいが伝わってきた。また、当時の町の人々の服装など、今では全く見られなくなった光景からは、なくなってから気付かされることもあるということが感じられた。ぜひ今後も鉄路の大切さや重要性を取り上げてほしい。

（ＮＨＫ側）

この番組は、2022 年度に道北・オホーツクエリアで放送してきたシリーズの集大成という位置づけだった。各エリアの放送局の取材力・制作力が増したことで、このような企画や番組が制作できるようになっている。

○　４月３日(月)の「ほっとニュースぐるっと道東！」を見た。特集「『こども家庭庁』

発足！十勝の子育て現場の期待」では、発足したばかりのこども家庭庁が、地域のＮＰＯをはじめとする民間団体との積極的な対話や連携を基本姿勢として打ち出している画期的な点を紹介していた。こども家庭庁の「こどもまんなか社会」のスローガンが本物になるよう、地域の人たちの関心を喚起し、あらゆる人に自分事として考えてもらうきっかけとなるような内容だった。日本の子どもの精神的幸福度や生活満足度が世界的に見ても低い水準にある状況だからこそ、今回のように子どもに関する問題点を今後も地域の番組で掘り下げていくことを期待している。

○　４月７日(金)の北海道道「地方選挙って、実はおもしろい！？」を見た。番組では、選挙あるいは政治に住民がどのように関わっていくことができるのかを示していた。ＮＨＫ北海道のホームページやＳＮＳでも、ほかの番組を含めて選挙関連の情報が積極的に発信されていた。「実はおもしろい！？」というタイトルは魅力的だったが、実際の番組内容はおもしろさを伝えるよりもまじめな解説だったので、タイトルと内容に少しずれがあると感じた。住民側から見た議員との関わり方の事例をもっと紹介してほしかった。住民の選挙への関心が薄れないよう、今後も機会をとらえて政治との多様な関わり方を取り上げてほしい。

（ＮＨＫ側）

制作したディレクターは、選挙の投票率を何とかして向上させることはできないかという問題意識を持って番組制作に取り組んだ。投票離れ、選挙離れ、ひいては政治離れが止まらない中、特に若い人たちに対して私たちは何ができるのかという問題意識を持って、タイトルに「実はおもしろい」とつけることにした。選挙が実は私たちの身近なものだということを「おもしろい」という言葉を使って伝えようとした。もう一つ、制作したディレクターは、国政よりも地方の政治を強く意識していた。何かを誰かが決めて、それが義務のように下りてくるわけではなく、私たち有権者が選んだ人々が議会で議論をして決まるということをしっかり伝えて、そこにおもしろさを感じてもらうことを目指した。

○　４月１８日(火)の「ほっとニュース北海道」を見た。「フラッシュニュース」は、ＡＩの自動音声が意外に聞き取りやすく斬新さを感じた。一方で、ニュースコーナーは分散していて統一感にかける印象だ。さらに、番組冒頭にキャスターの２人が言う「おかえりなさい」というフレーズには疑問が残る。というのも、「おかえりなさい」という言葉をかけられるのは、家に帰ってきたときやふるさとに帰ってきたときだか

らであり、新年度から大きく変わったこの番組がこの言葉を使うことが視聴者から好意的に受け止められるのは、現状では非常に難しいと思う。番組全体への意見として、「ほっとニュース北海道」をこうしたいという意欲の到達点が道内の視聴者の知る権利に寄与したり、公正な情報発信に役立ったりするところにあるとすれば、信念を曲げずに取り組み続けてほしい。

（ＮＨＫ側）

「おかえりなさい」というキャッチフレーズに関して、帰宅して家族に今日起きたことを話すという、いわば家庭内のニュースの延長線上に「ほっとニュース」を置けないかと発想し、「おかえりなさい。今日も一日お疲れさまでした」という気持ちで番組を放送したいという考えのもとでキャッチフレーズとして使っている。細かい見直しを日々重ねながら、よりよい形を目指したい。ニュースの原稿読みにＡＩを使用している点、ニュースのコーナーを分散している点は、どちらも演出の新たな試みである。１つのスタジオだけで伝え続けると番組としてメリハリがなくなってしまうことがあるので、あえて異なる雰囲気の演出を挟み、またスタジオに戻るというねらいを持っている。

○　「ほっとニュース北海道」の中で、ＡＩの自動音声でニュースが読まれている。それほど違和感はないが、周囲ではあまり印象がよくないという話も耳にする。なぜ部分的にＡＩを使用しているのか聞きたい。

（ＮＨＫ側）

ＡＩの自動音声でニュースを伝えているのは、違和感なく聞ける程度までＡＩ技術が磨かれて、導入することができているためである。原稿をＡＩに読み込ませると短時間で音声が出来上がり、すぐに映像にナレーションをつける編集作業ができるため、報道現場の作業効率が大幅に向上している。

○　４月１０日(月)～１４日(金)の「ほっとニュース北海道」を見た。「おかえりなさい」という言葉は挑戦的だと思うが、あきらめずに言い続けてほしい。新年度から放送開始が１８時からになり、放送時間が１０分延びたことで、幅広く丁寧に多くの話題を取り上げていた。メインキャスターの神門光太朗アナウンサーは、声に張りと切れがあり、硬軟それぞれの話題に合わせて語り口や表情を切り替えて伝えていて好印

象を持った。

（ＮＨＫ側）

視聴者にニュースの意味合いをきちんと伝えたり、ふだんの生活の中で視聴者がニュースをどう捉えればよいのかを提示したりできるよう努めている。

（ＮＨＫ側）

ＡＩアナウンサーについては、アナウンス室のアナウンサーがかなりの分量の原稿を読み込ませ、ディープラーニングによってよりスムーズな読みを実現させている。これから読み込ませていく回数が増えれば増えるほど、さらに滑らかになっていくだろうと思っている。

○　４月４日(火)から放送が始まった「言葉にできない、そんな夜。」の第２シーズンを見た。「言葉にできないその気持ち、こよい言葉にしてみませんか」というナレーションが心に響いた。特に番組ＭＣのスピードワゴンの小沢一敬さんのキャスティングに妙味があると思っている。気持ちを深く考え、言葉に乗せて表現するということにずっと集中すると自分に酔いそうになるところを和らげる役割を果たしており、それでいて何よりおもしろいのですばらしい。タイトルのロゴもセンスを感じるもので好感を持っている。第１シーズンのように、ゲストは固定ではないほうが番組に緊張感が生まれるのではないかと思っている。

○　４月４日(火)のＮＨＫ　ＭＵＳＩＣ　ＳＰＥＣＩＡＬ選「坂本龍一　Ｐｌａｙｉｎｇ　ｔｈｅ　Ｐｉａｎｏ　ｉｎ　ＮＨＫ」(総合 後 11:45～5 日(水)前 0:30)を見た。ゆっくりといとおしむように奏でられる一曲一曲が、坂本さんの人生を映しているかのように抒情にあふれ、胸にしみてすばらしかった。坂本さんの言葉から唯一無二の音楽を作ってきた彼の真骨頂を見た。

○　４月１１日(火)の「Ａ．Ｂ．Ｃ－Ｚ　今夜はＪ’ｓ倶楽部」を聴いた。大学生たちのありのままの様子をうかがい知ることができた。学生たちが熱心に共生や保護の必要性について語っていた。「ほっとニュース北海道」でも収録風景が紹介されており、学生たちのいきいきとした顔を見ることができたのもよかった。Ａ．Ｂ．Ｃ－Ｚの２人のコメントも共感と発見にあふれており、テレビやラジオ、ホームページといったさまざまなコンテンツを合わせてみると味わいが増した。

（ＮＨＫ側）

Ａ．Ｂ．Ｃ－Ｚの酪農学園大学での収録は、イベントやラジオの公開収録に加えて、「ほっとニュース北海道」で地域の番組の企画としても展開した。ＶＴＲを受けての神門アナウンサーの言葉は、本当に素直な驚きを表現したものだった。このように視聴者に近い目線できちんと感想を伝えることで、視聴者が納得感を得られるようにしていきたい。加えて、このような形で学生に寄り添いながらアカデミズムの現場の様子を伝えるということの大切さを改めて感じた。

○　４月１５日(土)のレギュラー番組への道「ロバート秋山　Ｐｒｏｄｕｃｅ　緊急！町民オーディション」を見た。町そのものの魅力をＰＲするというよりも、町民の一人一人の魅力を引き出した結果、町のＰＲにつながるというようなコンセプトが衝撃的で、印象に残った。

○　４月１６日(日)の小雪と発酵おばあちゃん「滋賀　畑漬」を見た。優しくゆったり流れる時間の中で微生物の生命活動に癒されながら、本当の豊かさとは何かということを穏やかに考えることができる良質な番組だと思った。取り扱う題材が日本各地にはまだまだ存在しているように思うので、これからも長く続けてほしい。

ＮＨＫ札幌放送局
番組審議会事務局